

特 10
890

090653-000-1

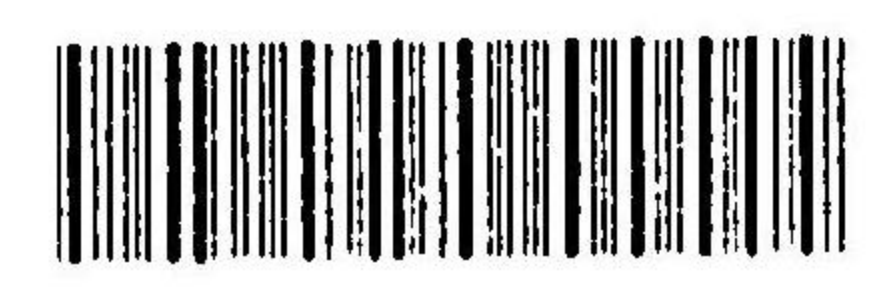
特10-890

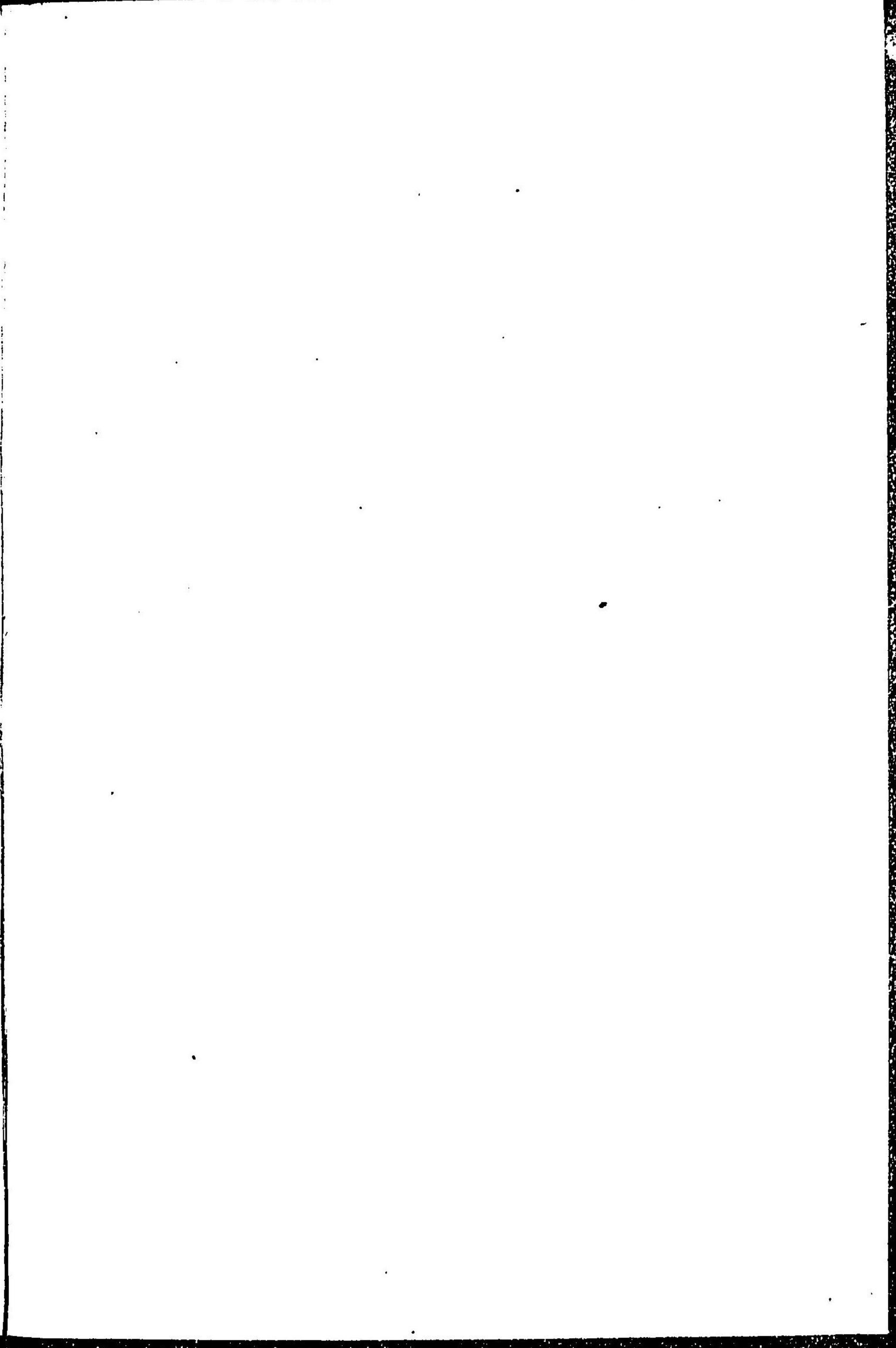
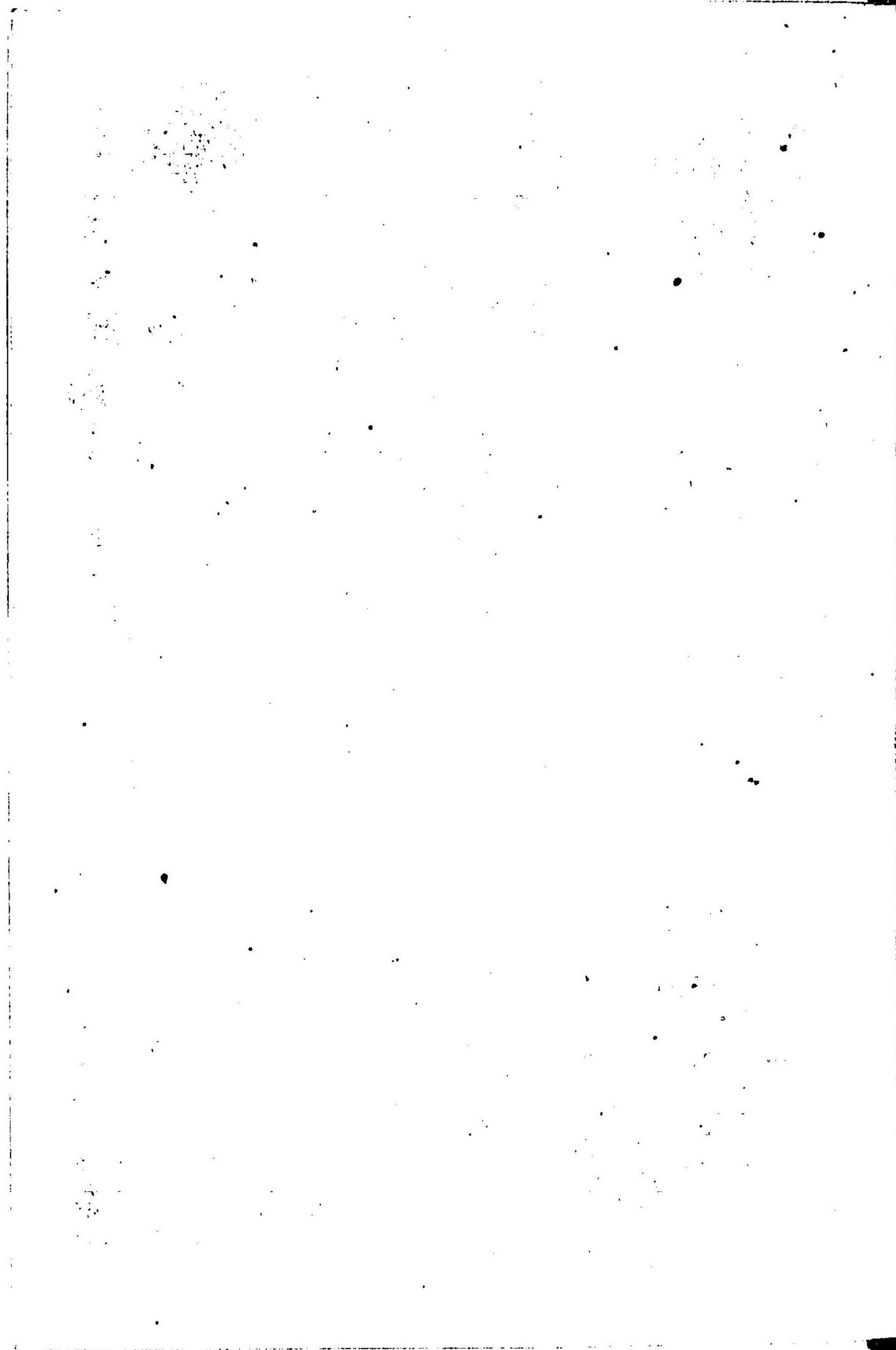
弘法大師御一代記

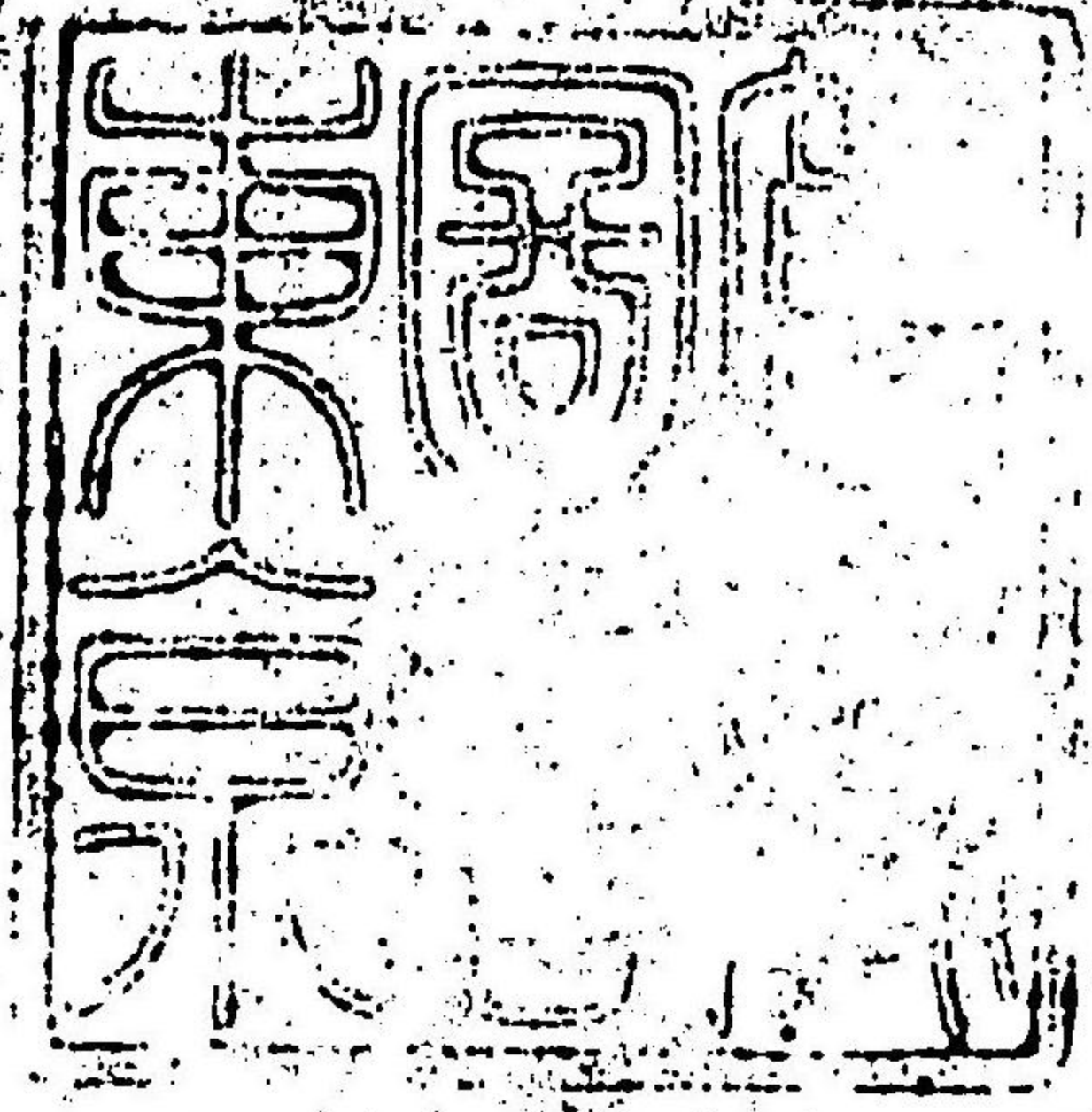
閻花堂

M19

DBN-1242

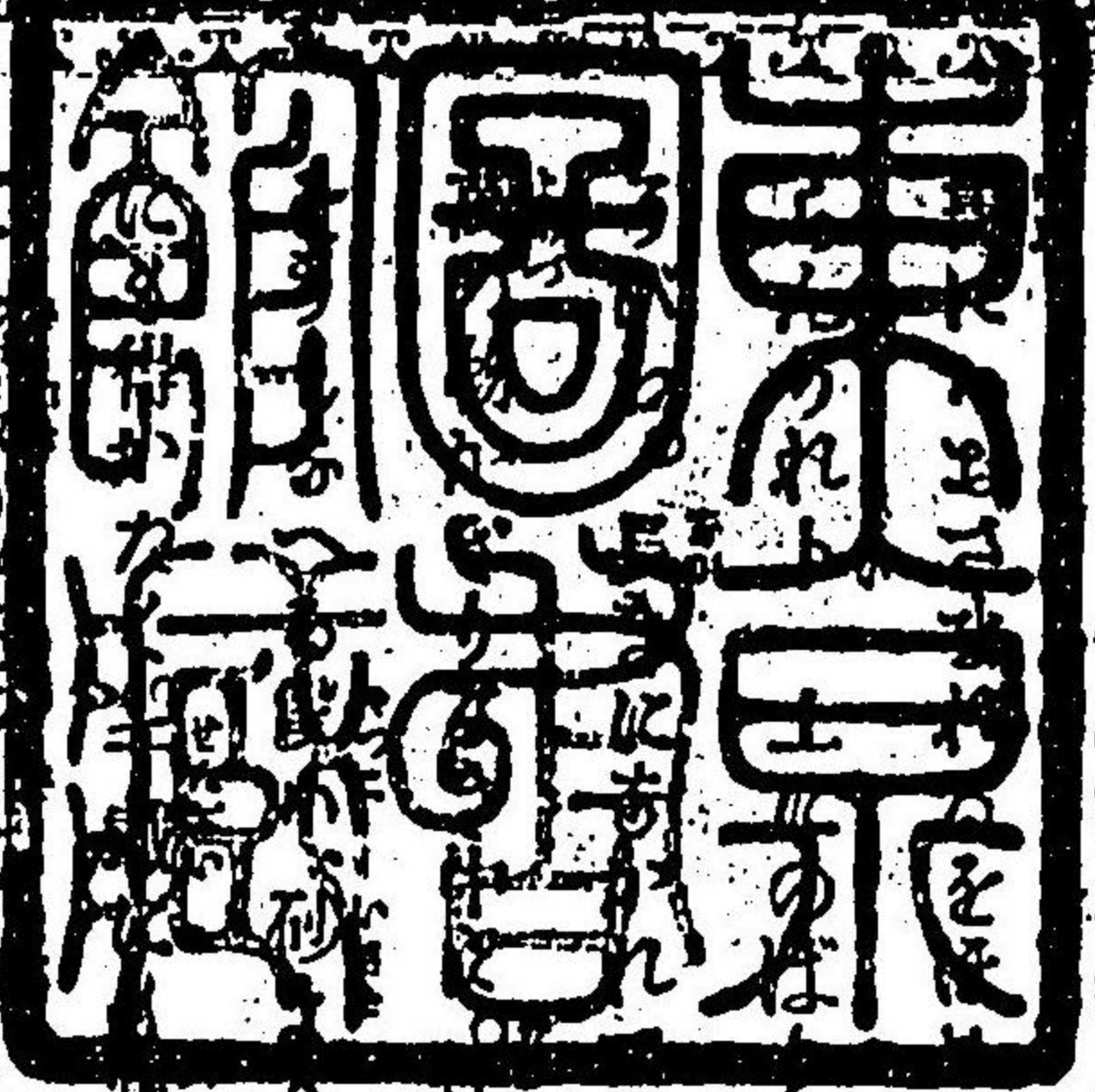






弘法大師御傳記序 天治十九年十月二十七日口授給付 1300

標のまじくのとく〜と。よきをあらめてこまごこひおしきとこみみてそれを捨。二つ
のものつらづれか勝。いづれか劣れる。されし詩よはみだれるを削て。門をみようたひ。
て。家とにたこまふ。實に故あるかあ。こころみに是をこどり
下にくだつて。月日よべにめぐり。あしたにはこび。山河海に
人畜縦におゆみ。横よはしり。ち々の名まじつりつらあつて。
只して且うやくしきは。人にあらへるはなし。然れ共うの心
りも多く。うの徳を盛ます賢さの玉よりをももし。故に五百
題とまれ也。昔 光仁天皇の淳字寶龜五年甲寅の年あみに書
て 讃岐の國。多度の郡に。如に挺生せる大士あり。人の形にして。佛のさとります法の
諱の空海和尚登壇散花の謬名の。遍照金剛。後に 喜延の帝弘法大師とをくり給ふ。天
精粹をゆるして。四表にたよび。地獄靈をみがいて。十方にかゝやき。生ながらに寂滅の





女人禁制を
犯して空海の
母様への怪異
不審あり



室戸の巻
室よ思龍
妖魔よ現
し空海を
とろくす

室戸の巻

幽蹟を慕ひつとめざるに異常の大妙にふける。遂に則ち聖王の朝ひに隨て。はたして法をもとむる人に推し。延曆の末、纒を解て人唐し。大同の始に桃をめぐらして歸朝す。即心即佛の道。此日にいたり。頓悟頓滿の風是時にしく。六凡親すれ。われかれ陸して萬國惠ぬれ。こゝかしと静也。況や又通を飛せば。目連身伽り。定を修すれば。除疑念噪き。智を振へ。文殊終唇を治し。悲を購へば。觀音奇眼を期す。若夫興學に出れば。樞樞よして文翁之。すゝまざるにとりひしき。草聖につけは。イ角にして伯英之。猶いやしきよあざけり。微詞を吐は。宋玉舌をまき佳詩を吟すれ。李氏口を閉。君主於反り黎民時雍けり。是故に馬摠の土人すら。子之ときりまれありと稱し。伯崇の朝も。とくく歸依すと嘆す。上智はおしへられすと。此の事まことなるかな。本を尋れば本地稱尊也。跡を語れば垂迹三地也。初には八葉の夢をつんで塵にまじはり。後には一樹の陰をもとめて林に入る。念すべしく。一念も念すれば。直に採取を。唱べしく。一唱も唱れば即捨給とす。嗚呼先來の本傳數記ありといへ共。奇しき文天にかけてとを

くたかし樵麈のみじかき何爲夫類とん。一庵眠さめて此事を恨み。曉來花に對して閉坐をいたましむる所に雪の髪せし人。竹のあみ戸をおしひらき。予が膝本にちかつき茶をくみく歸ていへらく。此比水のながれにたち。雲のちるにうぶのうとまに。大師の有がたき相を。いししし。撫て文を假字にやはらげ。事を給ふ寫して卷をなす。若をろかよしてたのみすくなき白ひげの老何心あくて情ある黒髪の見。少ばかりの信心を買。我は則直をまつもの也。おやしや。君は是誰ぞかからざるに深く。予之あけきをたすくるに似たり。いざ先見せ給といへば。欄よかくして。こゝにはもたず。たゞ序を作りてたへよ。はしに欄んといふ。予たもはく。文を披て序を青山を見て。景を賦するは古より人のあす所也。事を隠して。はしをけかせと。可笑人の云事や。然共今宵の勝を断にかさへる折からなれば夢かや覺す。其人の前にして筆を執。誠に須彌聚の筆は江海量の視も染たらず。定て其黨のうける所は。且座熱の一塵あらん。たゞ願ひあやまりを避てまこもつ。世に雅きものを嘔吐して。さるるそれく。さるるさるる事爾也

弘法大師御傳記目錄

- 大師御先祖之事
- 幼雅奇瑞多事
- 法の爲に捨身并天人天降る事
- 内典の抄勸學并抄出家の事
- 求圓寺持念并天より劔くたる事
- 伊豆國桂谷天狗法を妨事
- 土佐濱にて天狗問答并金剛頂寺抄建立の事
- 入唐求法の事
- 入唐着岸筆談の事
- 水上の文字龍と化する事
- 惠果和尚に抄受法并灌頂の事
- 守敏大唐へ護法をつかへす事
- 惠果和尚の碑銘を書給ふ事
- 鎮西資春の山に草木一時に生茂る事
- 万里の火難をすくひ給ふ事
- 同抄誕生之事
- 夢中佛菩薩と清談の事
- 外典の抄勸學の事
- 抄受法并三教指揮抄作ある事
- 室戸崎抄閑居并御詠歌事付惡龍法を妨事
- 虚空に文字すはつて天魔跡を削る事
- 抄夢の告有て大日經を得給ふ事
- 宇佐八幡にて入唐の抄祈禱の事
- 五筆上人と勅號を得給ふ事
- 靈山に參給ふ事付直に如來を拜玉ふ事
- 順曉阿闍梨弟子珍賀の事
- 惠果抄入滅再來の事
- 明州が日本へ三鈔を授給事
- 抄歸朝の事
- 抄朝帝參内の事并表をさへ給ふ事
- 聖德太子の抄廟へ參詣奇特多事

- 東大寺に蜂出る事
- 槇尾柴手水の事
- 川越の額之事
- 八幡御約諾の事
- 南圓堂の事
- 龍泉寺の事
- 小兒蘇生事
- 天地合の三字の事
- 水神福をもとむる事
- 靈山寺御結界の事
- 眞如親王の事
- 二人の名弟子の事
- 劍の抄山の事
- 土佐國朽木の橋の事
- 帝へ表をさへ給ふ事
- みかどの抄惱抄祈の事
- 大塔抄建立の事
- 八宗論并大師金色の如來と現じ給ふ事
- 高雄にて空海最澄へ灌頂を授け給ふ事
- 久米塔講經の事
- 室生山福田の事
- 大岑抄修行の事
- 天王寺日檢觀の事
- 牛の吼を聞知給ふ事
- 宇治川のわたしむりの事
- 僧油をかふる事
- 加持靈水の事
- 抄觀法の事
- 釋迦出現の事
- 善通寺願の事
- 高野へ尋入給ふ事
- 丹生明神抄託宣の事
- 三鈔寶劍の事
- 天下に疫癘をこり人死る事

- 秘録開題の事 死人蘇生の事
- 東寺を太師よつつかひさるゝ事
- 東寺西寺の事
- 雨の祈りの事
- 調伏法戦の事
- 惠果療を救ひ給ふ事
- 後七日の法の事
- 後遺言の事
- 後葬贈の事
- 贈號の事
- 延喜帝御衣を遣り給ふ事
- 淳裕手印ひし事
- 大師十號ある事
- 遺跡影向の事
- 宇治殿御夢想の事
- 匡房拜談の事
- 弘法大師御傳記目錄畢
- 帝御受注の事
- 稻荷大明神と御契諾の事
- 守敏術の事
- 神泉苑の事
- 良房卿一家の疫を治め給ふ事
- 皇嘉門の額の字力士とある事
- 眞如親王御影を書玉ふ事
- 後入城の事
- 嵯峨天皇後崩御并御棺南山へ飛行事
- 慈覺大師後夢想の事
- 石山觀賢大師の御髮髮剃給ふ事
- 大師號の事
- 幡慶夢想の事
- 關白殿御臨參の事
- 平大相國大塔修造の事
- 高野御幸の事

持10
890

- 秘傳開題の事 并 死人蘇生の事
- 東寺を太師よつかりさるゝ事
- 東寺西寺の事
- 雨の祈りの事
- 調伏御戦の事
- 惠果療を救ひ給ふ事
- 後七日の法の事
- 修遺言の事
- 修葬贈の事
- 贈號の事
- 延喜帝御衣を遣り給ふ事
- 淳裕手匂ひし事
- 大師十號ある事
- 遺跡影向の事
- 宇治殿御夢想の事
- 匡房拜談の事
- 高野御幸の事
- 平大相國大塔修造の事
- 關白殿御廟參の事
- 幡慶夢想の事
- 大師號の事
- 慈覺大師修夢想の事
- 石山觀賢大師の御髮髮剃給ふ事
- 嵯峨天皇修崩御并 御棺南山へ飛行事
- 眞如親王御影を畫玉ふ事
- 良房卿一家の疫を治め給ふ事
- 皇嘉門の額の字力士とある事
- 守敏術の事
- 神泉苑の事
- 帝御受法の事
- 稻荷大明神と御契諾の事

弘法大師御一大記

抑本朝眞言の高祖贈大僧正勅諭弘法大師ハ續岐國多度郡屏風浦と申す所の修生れよて
 ぞましくける。父は佐伯の直氏。母は阿刀氏。これもをどらせ給はぬ修氏あり。それさへき
 の姓と申すは。むかし天照太神素盞鳥尊。天下をあらうひ給ひて。あまてるおほんがみ日月
 を掌の中にして。天の岩戸にとちこもりたまへば。天下とこやみとなりける。八百萬の神
 達。これを悲しみ給ひ。岩戸の前ふてかくらを奏し給ひ。修心をあぐさめ給へば。いは戸をす
 こしひらかせ給ひける其時天兒屋根のみと。手力雄命いは戸をとつて虚空になけすて給へ
 り。日月天にかゝりやきけると也。ろの一神あまつみとの修する。豊島と申たてまつるはさ
 めきのとをつ祖神なり。ろの修する朝敵を退治し給へば。みかを御威のあまりに。地をわ
 かちてさぬきの國をつかはされしより。御子孫代々あひつたへて。今空海の御父まてか
 りる事なく。讃州を領し給ふなり。かくて夫婦めてたくさかへましくて内には神明佛陀を
 うやまひ。外には國民をいつくしみ給へは。國家ゆたかよおさまり。さに事も御心よか
 はせたまはずといふ事あり。しかはあれと四十の春秋をむかへ給へども。御子一人もま

まさず。夫婦これをいとしうしき物になげき。つねに神ほとけにいのり申させ給ひける。ある夜ふうふの御夢よ。天よりたつときひじりあまくたり。御ふどころへとび入給ふとたほしめしてより。夢はやかて覺にけり。ふうふ又の日ゆめ合し給ふにも。其ゆめいさゝかたがふ所なかりければ。いかさま年ごろの望もやかあふらんと。するたのもしく思しめしけり

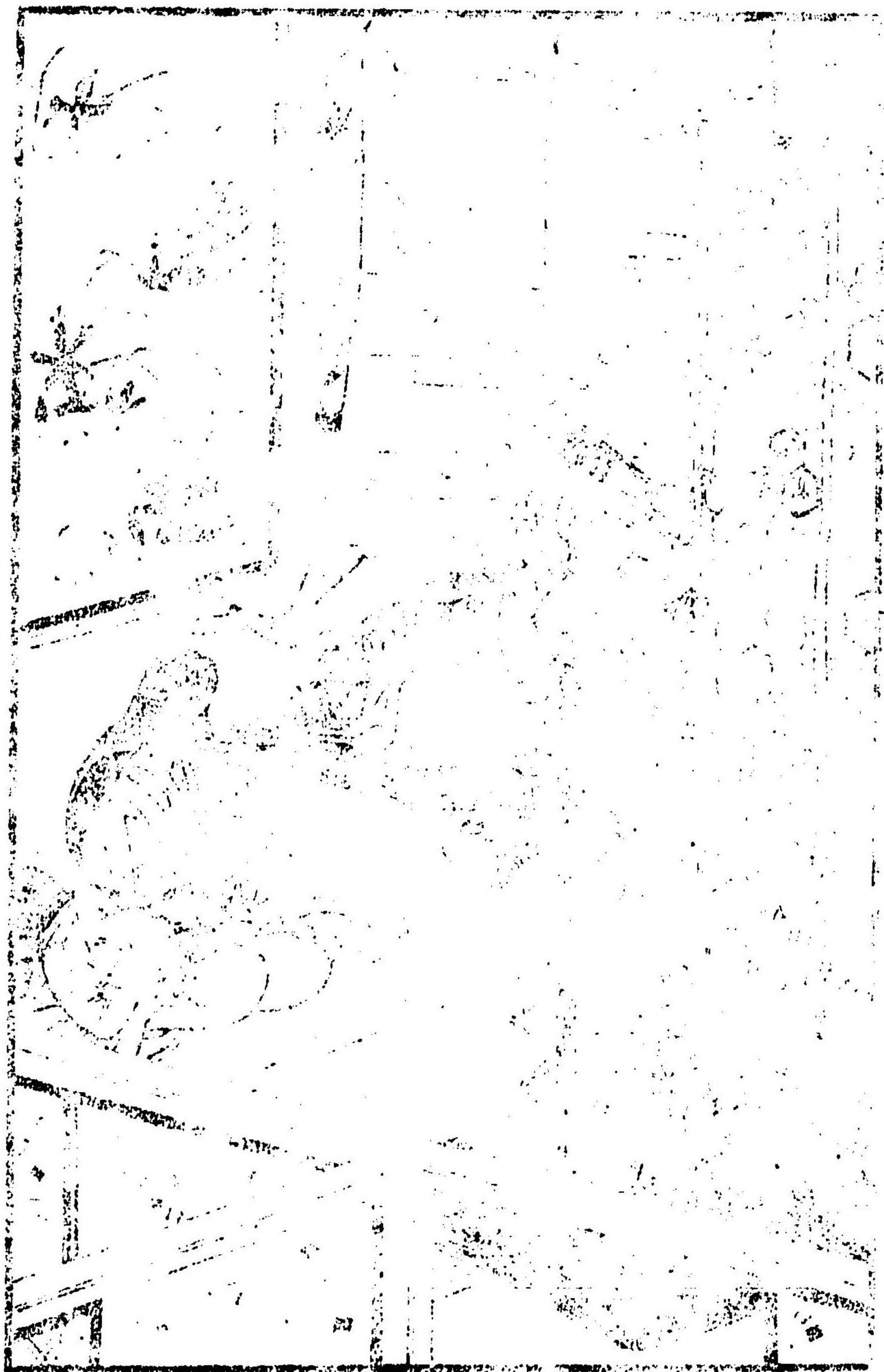
去程に。其月よりたいならぬ身とならせ給ひて。十月おまり二月を経て。多誕生まじましてけり。ころは八皇四十九代。光仁天皇の淳字。寶龜五年かの乙亥の年。多誕生ありし也。父母よろこび多子取あげ見玉へば。瑠璃をのべたるごとくある若君也。殊に淳まゝこさし常の人にかへりければ。まさしく佛菩薩の化現なるべし多靈夢といひ。人がらといひつねの人にあらじとたつとひあそれ寵愛し玉へば。みさく人にいたるまで。もてはやしたてまつらすといふ事あり

父母の多悦ひやも中々。あつか也。まことにたきてこの玉をもてあつおかごとくしたまふ。やうく四つ五つのごうよりも。利根發明萬人に拔て何事につけても。あきらかならばと

いふ事あしかりあめのたふれありひにも。よのつねの幼童のもてあつふ赤鷄竹馬のつたなきわざりしたまはず。つちくれをつかねては。佛菩薩の像をつくり。木のけしをわつめてり。堂塔をまなびて山屋をつくり。土佛をすへあらべたがみたうとひ。禮をなし。行道のまねをのみしたまへ。父母いよくありがたく思ひて。たさな名を貴物とぞあつけられける。其頃は問民苦使とて。みかをより國々へ勅使をめぐらされ。國主のよしおしをしるしめしけり。ある時ちよくし。さぬきの國へ下向ありしか。直氏公の御屋かたのほとりを通りたまふに。折ふし空海。門外に立出給ひ。小童どもを御ともなひましめて。土佛をつくり給ふちよくしこれをみて。いろぎ馬よりとびたり。つゝしんて空海を禮拜し奉り給ふ。國人これをあやしみて。勅使にむかひ申けるは。さしも勅使の御身として。このあさき人を禮し給ふ事。いとふしんにたはしましゆと申ければ。ちよくし宣まひけるはかたゝの目にはあがまれさせたまはずや。これある土佛をいとむ兒。權化の人よや四天王あまくたりたまひ。多うしろより蓋をさしかけ。鋒をたづさへしゆてし給ふとて。又禮してとをりたまへは。みさ人いよくたつとひけり



さて國中の人。此事をつたへきゝて。ふしぎのためひをなし。御名をばいはずして神童と
のみ名つけ申けり。やうやく六七さいにならせ給ふ其比より御道心の修ころさし深かり
けるが。夜あくの御夢に。八葉の蓮華にぞして。佛菩薩と物語したまふとのみ。つねに
ゆめみたまひければ。いよく佛弟子とあり給はん御心さざしけり
しかれども父母のひとり子にてましますべ。卒爾にやては出家の修のそみかなひがたかる
べしと。修夢の事をも。父母にかくし給ひて。修心にのぞみ思ひくらさせ給ひけるが。
きに事をのたまふにも。たゞ佛弟子とあり給はんことをのみのためひければ。父母も出家
の事の中へはほしめしむよりせ給ひねども。修夢といひ。御道心のふかき。修心さし
を見たまひて。いか様ほとけの化身の。わが子とあり給ふらん。しかるをふかくとめた
てまつらんは。無下あり。修成人したまはら。佛弟子とし奉まつらんと。よりくのたま
へば。いとけき修心にぞ。修するこびかありあし。修養心のほとを。われをころみた
まはんためにや。ひろかに修やかたをしのび出で。國のうちへけしき太山ありけるが。
ろの山のみねにはるゝと。たゞ一人修のほりあつて。十方を禮して。三寶にちかひたま



ふは。わが心さしのごとく。佛法をひろめて。衆生をさちひくほどの。沙門をあらんものぞ
と。たほしめさば。いのちをすくひたまへ。もし又。我ころさしむる一からん。たほ
しめさば。たすけにあづかるべからず。此たにぞこへどびあち死すべきありと。ねんこ
ろに諸佛へ修習願ありて。巖石峨々としてびわたる。うこふかき谷へ。修身をたしげもあ
飛いらせ給へり。そらより天人あまくだり。中にていごきあげたてまつれば。なを修ころ
ざしの。二ころあき事をあらりしたまはんとて。三度とばせたまへとも。すこしもつ
がきく。天人いだしあけたまひけり

さて諸佛もわが心さしのほどをわかれみ給ひけるよし。いとたのもしくて。屋かたをさ
して。かへり給ひ。さらぬていにて父母にもかくし給ける。まことに有がたき修心さしあり
し。かのいにしへの雪山童子。半偈の文に。修身を替させ給ふ事なり。いまた幼稚の修身に
てしらしめされぬ事も有べきに。世はるかありといへとも。修ころさしかなひけるころ
ふしなれ。佛菩薩といひあがら。有がたかりし事共あり。それよりして。かの山を捨
身の嶽と名つけて。今よいたりて哲人まいる禮しけると也。さて修業をたらせ給へば。筆

勢石にとをり。書をよんでは日に数千巻をひるかへし給ふ。ある時御母かたの伯父。阿刀宿禰大足といふ人ましくけるが。從五位伊與の親王の學士にて。博學多才の人にてありければ。空海十二の傳としより。彼人に隨て。文をあらひ給ふに。生れながらの才智をありしかば。いかある書ををしへせ給へども。しかへあらはせ給ふまでもなく。よみおぼへ給へば。大足大夫も奇異のおもひををしかる生智安行なること。いにしへよりつたへもきかず。たとひ佛弟子とはおらせ給ふとも。まづ外典の文をもあらはしめ給へど。父母にいさめられければ。とはりとは思はれられ共。かた時も離れまいらせしと思ひ給ふとあれば。はるくと都へ上せ奉らん事。心もなきて。一日くと延引になりしかば。大足しめて勸學のとをすしめ申されければ。空海傳悦ひかぎりなく。父母をまましく申さぐらめ。傳しとまを給へば。まこりばいつか山川の。灘つみだをせまらめ。これも我子のためるとて。志學の年と申よぞ。伯父大足にあつけまいらせ。みやこののぼせ給ひけり

其比の碩學直講味酒の淨成といふ。博學の師有。空海淨成を外典の師とし贈ひ毛詩左傳傳

書等をならひまなばせ給ふよ。一を聞て二百をとりたまへん。淨成も感にたえて。家の秘傳とするところまで。のこりなくつたへさづけたてまつる。それよりまた。岡田の博士に傳めひありて。左氏春秋をまなびたまひ。こゝやかしこときんがくせなせ給ひけり。登雪のまをよ。傳まををらして。讀書のおしまつきに。傳ひぢをばなし給へず。つとめはげみ玉へは。つねの人の二三十年の學業を。わつかに四五年のうちにきりめ玉ひて。傳まなひの花實時を待すしてひらき。千載の春秋の。心のうちにきはめ。一期の錦繡の筆のまををらやかなり。いまはや傳心よかゝる雲もなく。風月の才もくもりあかりしとかや

さて佛法しゆぎやうあるべしとて。其比の名知識。石淵の勸操和尚の室に入らせたまひけり。此和尚と申す。三論宗の名徳にて。世のまことなつとき和尚にてましくけり。御座の親は傳むねのうちにあきらかに。八不の理は傳舌のはしよめらか也。世の人明星の化身なりとやけり。此和尚に對面ありければ。勸操和尚のたまひけるは。此人の相。たい人はいあらずと。殊によろこひ玉ひて。師弟の傳契約あさからすまじりけり

其後やがて。和泉國。槇尾寺にともなひまゐらせで。修とし二十と申す。つねに修かみを
 たろさせ給ひて。修出家をどげさせ給ひ。すまはち沙彌の十戒。七十二の威儀を。さつが
 りたてまつり。修名を教海と申けり。修修行たたらせたまはせ。一しやう三だんの修工
 夫。よるは。夜もすがら瑜珈の法水に。三密の月をすまし。ひるはひめもすに。本地の風
 光に獨座の觀をおきらめ。おふさきるさ。いねてもさめても。修持念をこたらせ給はず。
 やかて修名ゆほうましくて。五大虚空藏の法能滿座虚空藏の法を。さつからせ給ふて。又
 修名を如空とあらためたまひぬ。さつからせたまふところの修法。修くハんねんじやうじ
 ゆましくける

其のち。修とし二十二と申す。南都の東大寺の戒壇院にのほりたまひ。具足戒をさつが
 り。又御名をあらためて空海と名づけたまふ。いよ／＼修法めらからまたふとひましま
 して。佛教のありがたきとを。ふかく思ひ入。俗教のつたあき事とのべて。修指揮とい
 ふ書を。三巻よならびあつめ。人にあめし給ふ。今の三教指揮これなり。修指揮とい
 其後阿波の大龍寺と云山寺にこもりぬ。虚空藏の法をしゆし給ふに。たまたま恐地の相



らひれて。天より大なる剣とひ來りて。持念まします瑜伽の壇の上にたちけり。此劍い
まよをいてかの寺にこもりてあると。空海種々のまどくをあらはし給ふとはよく此法を
しゆし給ふゆへ。いま時の人も。よく此法をしゆしければ。あらたあるしるしどもあ
ほくあらざる事ありとかや。ひとへに空海のしゆしをき給ふ。御行法をうけつぐゆゑを
り。まことにありがたき事共こ

さて御しゆぎやう成就しければ。又勸操和尚御さづけありし。御秘法虚空藏求聞持の法を
御しゆぎやうあるべしとまほしめしけるが。うき世のちりもみだりがはしからぬ地をもと
めんとて。こゝかしこと行脚したまへども御ころのどまる地もなかりけるが。土佐の國
室戸崎といふところにつき給へばきやうちすぐれたる地ありけり。南海はるかにみわたす
は。渺々として山も見えず。青巖かたはらにういたち。松をばらう。みねのあらし。煩
惱のゆめをやぶり。いはにくだかるいそのなみの安心の垢をあらひ。村煙をくへだより。
雲水悠々としてまことに。三千世界もまのまへにつきぬへし。傍てころのまゝありし。境地
ありければ。よろこひ給ひて。こゝぞよきすみかともほしめし。あつかざる。しばのいほ

りをむとびたまひて。空閑寂靜は。如來の夢をしへにかさひ。靈木靈水は。相應の地形ありとたのしみ。たゞ一人こゝろをすまして。いほりよ坐し給ふよいろのみみはまぢどり。みねのあらしたにのこたへ。いとものおはれなりければ。此國のならはしなりとたばしめしつゝけさせたまひて三十一字のこのはを。口すさひて夢いほりのかべよかきつげさせ給ふ其歌に

法性の室戸といへどわがすめばうおのきみかせよせぬ日るまじ

とあそばし。なぐさませたまひける。さて夢こゝろもすみやかに。あに事もまたげなく。ちりをいでたるすみかぞと。かの求聞持の法をしゆして。夢持念しまし〜ければ。海中の惡龍惡魚異類異形にかたちを現じて。よま〜夢いほりちかくきたりて。夢しゆぎやうをさまたげたてまつらんと。あるひついかづち雨風をならし。またハ大蛇鬼形とあらはれ又ついつくしげなる女となりて。夢こゝろをまよはし夢行法をさまたげんとしければとすこしもさはざたまはずなを夢持念おこたらせ給はずまし〜ける處にしさりにおら〜か成聲をわけ異形のもの共夢夢ととりまきたかしたてまつらんとひしめきあ入り

空海。しづかに菴をたち出させ給ひ。いろへにやすらひ。しばらく求聞持の神咒をとなへ給へば。夢口に明星どび入たまふとおほしめし。口中の唾をはき出し給へば。唾き海底よしづみて。たちまちくわうみやうかゝやき。よま〜ひかり海中にうつりすまじかりければ。もろ〜の惡龍惡魚。かのひかりにたうれてふた〜び來る事もなく。いよく夢修行じやうじゆし給ひてけり。さてかりの夢すまおとは申せ共。軒端こけむし木たち物ふりければ。空海たばしめしける。たよろしやもんは。桑下にも三宿とへからずとの。夢いましめありしに。しづかあるすみかあれば。あほぬす月日をうつしけるよとて。さしもすみなれさせ給ひし。夢菴をうちすて給ひて。何國ともなく夢立出てまし〜ける。かくて草鞋のゆくにまかせて。夢しゆぎやうありしに。伊豆の國桂谷と云所よ。古寺ありける。山ふかき寺なれば。狗品おほくすみて。いかあるたつとまごやうじやも。彼寺に一日一夜も住するものおければ。をのづから。人の往來もたえはて〜。甕やぶれてハ霧不斷の香を焼。扉たちては。月常住の灯をか〜と。かゝる所をや。まごにかりにも火のやすらふへま〜やうはさかりし。もろ〜の惡魔共心のま〜にすみきして。すま〜しかりし有様なり

しかど。空海此寺を淨覽して。是ころよき閑居の所あれとて。こもりお給ひて淨行法おこたり給ひせはしむしけるに。案のどく天狗共こゝの山々かしのみねくりにあつまりゐてはしをならし。つばさをたゞき。行法をさまたぐる評定とりく。空海微笑したまひ。頓に魔界をやふり。佛地をさすべきものをとたばしめされ。淨心しつかま淨しゆぎやうありて。默然と菴に坐し給へは。魔縁共是をみて。人さらば三三千人が聲あらんとたばしき。大なるにて一度よどつとわらひをあげ。あるひは屋の棟をつかんで寺をゆすり。引くづさんとし。又ハ大木巖石などをなげつけ。雨風おびたしく。瑜伽の壇もくづるゝばかりに。わざをさしける有様。人間の片時も堪てすむへきやうもあかりしか共。空海すこしもあどろき給はず。しかれ共かゝるあくまねはくは始終人の來りすまんと。かきひがたかるべしとたばし召。とかく天狗におとをたれさせてはかふるまじとて。虚空よむかつて。大般若の魔事を書つけさせ給へり。虚空に文字。すはりて。六書八牀の點畫すこしも乱るゝ事なく。あきらかふ文字すはり其文字よりくわうみやうかゝやくとして十方をてらしければ。天狗ども其ひかりにをされて。八方ににげ去てあへてちかづく事なく。四方

の山々音もせせ。物しづかみ成にけり。空海いよゝ淨持念おつてつから。大日如來の尊像をつくり給ひて。彼寺の本尊に安置してたこなひすまし給へりよゝ惡魔境をとり。かへつて佛法はんじやうの地となりて。國土のまじりの淨寺とそまりみけり。ろの隣國のたみ百せいにいたるまで。ろのゝちはまねんにたろるゝ事なくいまの代までもめてたき靈地とそありにける。倍又此寺を名づけて。修善寺と申あり。有がたかりし靈驗筆にもつくしがたき事どもこ

ろれより又土佐の國におもむき給ふ。かのむろ戸より。三十町ばかりへたゞりたる。濱邊に。ひとつ勝地の有けり。空海伽藍を立るによろしき所とおぼしめし。こゝかしてごたちもどをり給へは。日もはや西よかたぶけり。そのかたはらに大きな楠あり。いくはく年を経けるとも思ひわきがたし。又木のもとを見給へり。大きなうつろ穴あり。中に人の音しけれと幸なり。こよひに此うつろよ宿をかり。一夜をおかさやとたばし召立より淨覽有ければ。さはなくして。異類異形の天狗共よりあつまりぬおよろ日本國中の惡魔共の寄あひ所とも見へければ。心見んと思ひたまひて。ちかゝと立寄一夜の宿を乞

給へば。天狗共たちさばき。いかれるこはねをさしあげ。我々幾年か。此洞にあつまりあるに。人間の來る事なし。さればわが輩もあらざれば。此内へいる事なし。いつのよしみにか宿をかすべきや。よしなきことをのたまふ者かある。をのくはねをたきつ嘴をあらしてとがめのしりけるに。空海すこしもさり給へば。しばらくしあんなましますに。此所にかれがたるあらば。法のさまたげをなし。伽藍てんりうのさりをさるべきものなり。さらば此地をさらすべしと。伊手をこまぬきて。咒をさへ玉へば。かのほらのほとりより。にわかにくわえんもあしける。となつたまふところのしんこん火界の咒あれハ八方よりもなごかれしかば。天狗どもおほきにあそび。をのくけぶり。むせびつ。これはいかならん事ぞとて。かのほらをとび出。四面八はうふとびさりける。さてはあもふまゝあり。さりながら末世に又此ほらに魔縁ども來りて。すむともあるべし。かくていあしかりなると。みづからの伊すがたをつくらせ給ひて。かのほらにあんちしかたく結界ましくして。つおにその地にがらんをつくり。ちんて國家のまほりとあし給ひける。今の金剛頂寺これなり。うのくち國中のおくまあをけつりしとかや。げよありが

たき榴者之善神擁護し給ふゆへあるべし。日本國中のおくま。千里の外におひはらひ。魔境を變して。佛地とあし天下のまもりと。ふうじかへさせ給ふあり。伊しゆぎやうの伊あり様を聞に。鹹に身を粉にし。骨をすりくつにすとといへるも。かゝる事をや。名山絶嶮。山より山にいり。連峯孤壑みねよりみねにうつり。伊しゆぎやう。としをかさね。伊苦身日をつみたまふ。おかつき。いつほのさかしさをすぎては。雲伊くつのおとをうつみ。夜洞のかすかあるにねふり給へり。風坐禪の窓をとふらひ。煙霞をなめてハ飢をわすれ。禽獸にあらは友となしあるひは阿波の大瀧のたけにのぼり。又は土佐の室戸の嶮持念し。明星伊口よ入りしを。はき出し給へば。光明をはあつて。毒蛇をしりぞけし事。ぼさつのおとくあらはれ。佛法の無二を現じ。心花たちまちひらけて。諸佛の性相を盡し給ふ。即其光海よあづんで。今ふ至ると。稻金色の光を残し給ふ。いとたうとかりけり。玄冬深雪のさむきうらにも。ひとへなる。藤の衣のうすきをいとはず。盛夏炎天のおつき日も。巖漿をたつて。精進懺悔し給ふ事二十年にをよびしとかや。まことに權化の伊身とはいひあから。ありがたかりし事共へ

かくて空海この山々かしの浦々にて。多しゆきやうおこたりをましくける。あほ
 心に決定し給ひざるとあれ。ほどけの多まへにて清淨の淨心さしをこらしめてちかひたま
 ひくわれ佛法にしたがひてつねに心をくたき。しゆくゝの法をしゆしむとむるに。三乘五
 乘十二部經。心神にあをうたがひあり。たねがはくは十方三世の諸佛。われよ不二の法
 をしめし給へど。かんたんをくたきていのり給ひける。あまりに多くたびれありて。壇の
 上におぼぬすまをろみたのしけるにあらたある多ゆめあり。いづくともなく。一人一人來り
 て。こゝに經王あり。大毘盧遮那經と名づくあんちがもとむるところの大法は是なり。大
 和國。高市郡久米の道場たうぢやうの東塔とうたうのもとにありと。つげしらしめ給へば大師多夢心にも。い
 とたのもしくおぼしめして。三世の諸佛を禮し給ふと。おぼし召けれ。多夢のさめにけ
 り
 さていねんぐのんかあへりと。多よろこびかぎりなく。かの道場たうぢやうまたつね行給ふに。東塔
 の真柱まゝしらに。あやかしき取あり。柱のはぎめをばなし見給へば多無想の如く。大日經一部七
 卷あり。紐をといて見玉ふに。まことに甚深不可思議の經王なれば。權化の身なりといへ



共。其理分明りんみんに解知げちし給ふ事あたはずされどもおほむねくがひ玉ふところの法理ほつり成けれハ
佛ぶつの法ほふをしへなるべしと。ありがたくこそ。たほしめされけれ。此寺てらのえんぎを尋ぬる
に。此經まきらハ養老年中やうらうちゆうに。善無畏三藏ぜんむゐさんざう。日本へわたり玉ひて。密教みつぎょうをひろめ給はんと。たほ
しめしけるが。時節じせついまだいたらずとて。むなしくかへりたまひしとき。此經まきらを。此塔たつの
はしらにぬり入て。未來みらいに。三地さんちの菩薩ぼさつきたりて。是をひらくべしとのたまひて。歸國きこくあ
りしと。久米寺くめてらの縁起えんぎにくはしくのせ侍りしがまことにいま空海くうかい法ほふゆめのつげによりて。此
法ほふ經きやうにたづねあたり玉ふ事うたがひなく。空海くうかいは三地さんちの菩薩ぼさつの化身けしんありと世の人中傳へ
ける
さてかの法ほふきやうは。えたまふといへどもよりくふしんしんの事どもおほかりぬ。しかれ
共。此國こくにおいて此法ほふ經きやうの義理ぎりしれる人あらされば。とひ玉ふべきたよりもあかりけるゆ
へ。入唐にっぽう求法きうほふあるべきとの法ほふころさしをたこりける。誠に海うみはらはるかなるみちなれば
いよく佛神ぶつじんまたのみをかけ給ひて。風波ふうはの難たふもなきやうに法ほふきねんあるべしとて。手づ
から藥師やくし如來にょらいの尊像そんざうを。白檀びやくたんの木をもつてつくりたまへり。いま仁和寺にんおに喜多院きだのゐんの本尊ほんぞんこれ

あり。むかし。西蕃萬里の絶域にたもむきて。擁護を東土の教主におぼせ。いまは東寺
 一流の法水をたへて。靈像を西郊の仁祠にとむ。その本縁をたすふに感涙うらに催せ
 り。又海上擁護のために。般若心經百卷書たまひて。宇佐八幡にたさめたまひけり
 其後いよく入唐の途こころざしふかくまゝして。みかどにうらもん中玉へ。みかど
 侈感あゝめあらずして。すなはち遣唐使をえらび出され。正三位越前國前太守藤原朝臣
 賀能に留學の勅命ありて。大師淳年三十一にして。延暦二十三年五月十二日に。帝都を涉
 立出在て。肥前國松浦といふ所よて船よろひしたまひて。はるかに滄海の西にぞうかびた
 まひける。古郷の空をかへりみて。日本大小の神祇に涉いとまこひましくて。わがのそ
 ひところの大法しゆぎやう。むやうむゆせしめたまへと。ねんごろに禮し。まなくたる
 海路をすぎたまへば。ほどりもななくさへもあくして。たい天水のいろあをみたるばかりよ
 して。みねも山もみ多わかず日をたくり。月をむかへて行たまふほどに。やうやく八月の
 はじめに。福州の地にぞつき給ひける。いにしへより入唐のひとへ。楊州蘇州といふ所に
 つまける。うれだに海上三千里也。此度は難風に吹はきたれ。からうして。ふく州のさし

につかれける。其道三千七百里とぞ聞えける
 すてに大唐のさしにつまぬれば。をのく色をををして。まづ福州におがり。正三位越前
 太守藤原朝臣賀能遣唐使として。わたれるよしの書をかきて。福州の長につかはしける。
 州の長。ひらさ見て。しかく見るまでもあく。地にあげすてけり。またぶんを巧にし
 て書つかはせ共。あへていらへもせずかく二たび三たびまで。書をつかはしけるに。つお
 よ一度も返書せず。これは揚州か蘇州にはいたらせして。此舟福州につきぬるを。あや
 しみてや。又遣唐使と云しるしあやもみ多ざりけるまや。ひとへにたいよふてはなたれて
 きたるふねの。いかあるばかりとにやあるらんとうたがひをなして。船をかたくふうじ人
 をもはたらかさず。船をもうごかさず。みまぐすなばまにをひあげ。更にあはれむけし
 きさく。かたくばんをつけてまもらせける。其時賀能空海に申されけるは。州の長に書を
 つかはすれどもちひす。いかは成ゆきなんあさまし。進退こゝにきはまりぬ。此上は
 又和尚書をつかりしてこころみ給へかして。申されければ。空海さらはとて賀能にかはり
 て筆をけしらしめ給ふ。其文ついまやかにして。其理妙也。州の長ひらきみて再三これを

味ふよ。まことに權化の筆作れば。かゝるめてたき超世の人を。此比くるしめまいらせつる。凡夫の身ころ。つたなけれど先非をくひてすあひち舟のまもりをゆるし。かへつて人ををいたり。舟路の勞をさぐさめけり

さすか福州一國のつかさなりければころ。權化の文筆ありと。はやくもしる事の。いとかしこかりけれ。扱つかさ此由をくはしくしるして。長安の都へ奉聞中けるに。みかどよろこび玉ひて。三十九日をへて。見かどより米たのらをねほく送りて。かてをつがしむ。其外しゆくの送り物をありて。十三ヶ所のたびやをつくらしめて。空海ならびよ。賀能をもすへたてまつりて。あさゆふくるしみをとひ。晝夜にころざしをつうじ。慈母の子をいつくしむがごとくしける

はじめと。他國の人とて。いらへもせざりければ。かきしひをふくむといへとも。いまは。親子兄弟のよしみにまさりければ。空海いよくたのもしく思召けり。かくて五十八日をへて。みやこより存問のちよくしをそくだされける。そのさきたてそかなり。空海又賀能にかはりて。入京すべきよしの書つくりて州の長にあたへたまふよ。州の長このよしを

見て。尊命もつともありとて。うのむねくつしくみかどをそうもんやければ。みかどをいらんあつて。いそぎ涉むかひのちよくしをたまひりける。うのよろほひまことにびれいありしありさま。目をおどろかすばかりなり。大使をむかふるに。七ちんのくらをもつてし。それよりしもつかたの人に。かざりのくらをもつてぞ。むかへられける。したくみなこゝをせんど。美をつくし。善をつくして涉どものさしき。とばよものへがたく筆にもつくしかたかりし事共こ

路次中のけんぶつ。きせん男女ちまたまみち。市をあすがとくありしまことに綺羅天にひるかへり。錦繡地をてらすありさま。空海をたつとひ申たてまつりしゆへなり。貞元二十年十二月廿三日にぞ。みやこに入れたまひける。うのときの天子は徳宗皇帝とぞ申ける。宣陽坊の舊宅に入れまいらせて。おられうやまひ申されける

かくて月日を送り給ふよ。其比宮中修理の事在しが。三間の壁にうちつけ書在し。是の昔晋の右軍王羲之といふ人。其銘を作りて書ける今度修修ありて後。筆をくたし羲之につぐものあり。淨門の勅有ける今度入唐の沙門書ところの筆勢をみるに。いにしへの羲

之よ劣べき筆だてとて、覽へず彼人を請せよとのみとのり有しかば。空海參内ましくけり。
 扱硯筆を奉りて。此壁にあらうべせと申ければ。空海左右の手足をらびに。淨口に筆をもた
 せすへて。五の筆をさへげて。五行を一度に書給ふ。見かどをはじめ。公卿大夫上下これ
 を見物してたどろきあやしむ事かぎりなし。いまだ書つけ給はぬ壁一間ありければ又此か
 べよりのかかるけしきあらんと。そのくあからめせず。あがめ入て見るごと。いふ
 もねろかなりさてまた。すみをとらせ。瑠璃のたらねに入させ。かべのたもてにかけ給へ
 べたのづから樹といふ字をありて。一間のかべにはびこりて。筆勢いけるがごとく也。一
 人三公感歎さるに銘じ。奇異の思ひをぞかしける。みかどぬいかんのあまりに。勅ありて。
 空海を五筆和尚と號し申させ給ひて。ことに賞斷ありしとかや代々臨地の功をいたし。入
 木ののどをまぶぶ人。唐國におほしといへ共。空海一人垂露の點をといめ給ふ事我朝の威
 をあらにすにあらずや。されは淨弟子の眞淨僧正大師の淨筆ののどをほめ給ふことばに。隙鶴
 奔獸の點。ひとり九州にとまり。涌雲廻水の書。さかりに入絃に響すとのたまひしも。
 げよとはりかな。さて貞元二十一年二月十一日みかどよみかこのりありて。遣唐の大使

賀能は。日本に歸朝有べしとて。椽々の引出物をたまはりて。歸朝ありけるが。空海和
 尚はみかどよりといめ給ひて。たい淨一人のこりて。西明寺の永忠和尚の故院にすませ給
 ひけり。みやこのうち。こゝかしこの名所の風景を淨覽んし。なぐさませたまひしに。水
 草しげき野邊をさまよひありきたまふ。かたいらふいさぎよく。すいしけあるあがれ有。
 流れ行有様しかももの水ならざるけしき。おもしらく思召。しばらくあがめ居給ふとこ
 ろに。いづくともあく童子一人出來たりけり其姿つねの人と替りて。蓬のかみのみだれ
 てかたすき藤の衣のやぶれてひざたにもかくさず。まぶさざしあくまですまじけるが。
 いと心よげにゑみてきたりし。いか様とやうあるものかあと。まもりお給ふ處に。かの
 わらは空海にむかひて申ける。和尚の日本の沙門五筆上人にてましますかととひければ
 空海しかなりとこたへ給ふ。さては能書の人なると。うけ給り及びし也。虚空に文字を書
 べらはし給ひてんやと。申ければ。空海すなはち虚空にむかひて。文字をかきあはし給
 ふに。こゝろに文字すりて。さらなき。かのわらひ我も書てんことどもに書てけり。
 又わらひ中さく流水にかきたまへ。見侍らんといひしかは。空海すみすりさかし筆をろめ

て。さしもあかれはやき水の面に。詩をつくりてかきたまふに。文字あがれにうかひて。さらにみだれずして。ながれにしたがひ。川の瀬にながれゆく。童子これを見。大によろこび。おみをにふくみ。かんに堪かねたるいろをあらはし。われもかきなん。和尚見給へどて。龍の字をかくに。波のうへにうかびて。さらにあがる事あしわざと右の小點をうたずして。たちさりける。和尚見給ひて。なにとて點をばうち給はぬと。のたまへ。わすれにけり。上人小點をくはへて。たびたまへと。ありしかば。上人點をうち給ふとき。文字たちまち大龍となりて天地もひゞき。ひかりをはなつて。虚空にのぼりけり。上人かののらはにむかひ給ひて。君はいかなる人にてましますやと。とせ給へ。かのわらは。よつことわらひ。われは是五臺山の文珠ありとて。相好をあらわし。虚空にとびさり給へ。藤のころもは。瓔珞と變じ。雲上に童子のかたちを現じ。天人蓋をさしかけ。ゆきがたしらすあり給ふ。和尚ありがたくおぼしめし。持念ましくて。大聖の御心まで。わが行徳を感應あつて。あらわれ出させ給ふとよと。たのもしくたはしめしけり。もろこじにましくける時も。かゝるふしぎをもたほかりけるとぞ。さて在唐のうち。つねに浮

心にかげられけるは。ねがひくハ靈山にのぼりて如來の御すがたをねがみ。たてまつらんとをおぼしめしたまひ。朝をゆふな。諸佛にいのりたはしませ。あるときいつくともあく神童一人とび来る。其すがた。はあんだあやし。よのつねのひとにはあらぬ。靈異ありて。よく人の思ふ所をしれり。和尚にむかひて靈鷲山にまゐり給へといふ。和尚のたまひける。われつねにこれをのぞむよくわがころざしをしり給へり。しかれども山河はるかよさがしきみちよて。こゝに數萬里の難所を。へたてたるとうけたまわれ。たやすくいたらんとかたしと。おほせられければ。うのときいつかたよりともなく。しろき馬にかざれるくらあぶみをかけて。とひきたる神童あり。和尚にすゝめて此馬にのり給へと申ければ和尚をさへちのりたまふに。此馬とぶがとくにして。流沙をわたりけり。扱馬よりあり給へ。神童やされし。しばらく是よやすませ給へと。いひもはてぬに。長七八尺ばかりなる青きひつじ。是もかざりくらをいて。和尚の御前にとび来る。又これに乗給ひ。山々嶺々のけはしきもしらす。とびすぎ玉ふ。其後夜叉神飛車をひさげ來りて。和尚を乗まゐらせ。かのくるまにうちそひて。虚空をかけり行ほどに靈山のもとにいた

りぬ。たほしめす處よ。いづくともなくたきあきたり。和尙にむかひてなんぢのいつくの人ぞとやける。

和尙のたまひけるは。我はもと日本の沙門之しが。求法の爲に。支那國に年を重ねてまれり。今我靈山（今山）のほり。尺尊（尺尊）を拜み奉らん望有とのたまへ。翁曰（翁曰）んぢも異相あり。かあらぞうの本意かなふべし。去乍佛の渉入滅年をへたり。たやすくながみたまはん事かたかるべしもつはら生佛不二の觀をなさべ。蓋障をはらつて。佛身をたがみたまはん。かたりて。ゆきかたしらずありしかば和尙おきなのをししとく。淨觀念ましくければ。にはかに山のひびき。谷のこたへいかづちのさるがとくにして。いと心よくすしき風そよぎて。木をるをうごかし。地ふるふと。水の上の舟のごとしいとかうばしきくも谷にみちて異香（異香）てんに薫じける。ありがたかりしけしき。然る所に虚空より一つの鉢（鉢）まひさがりて。中よそひて十方にひかりをいなちて道をしめしける。其ひかりにて道をふみ分。山のいたゞきにのぼり玉へげ。すあへちむらさきの雲まひさがりて。釋尊蓮臺に坐し玉へ。觀音虚空藏左右に坐し。八万の大士。二千の聲聞威神儼肅（威神儼肅）みして。をのゝ集會に。つら

あり玉ひしよろほひ。有がたかりし事共あり。見佛（見佛）のちからによつて。空海たちまた。除蓋障三昧を。えたまふ。如來空海につげてのたまはくなんぢむかし徳本をうへて。いま又値遇せり。我内証秘密。是をまゐんで。法をひろめ生を利する事はるかに後佛の出世につたふべしと。のたまひければ空海信心（信心）きもに銘して旋遶禮拜（旋遶禮拜）し。長跪合掌（長跪合掌）し。つゝしんで渉をしへをうけ玉へ。山のふもとにかへると。おほしめしければ。もとのとく。飛車青羊白馬來りて。次第に送り奉りて。片時の間に唐土の西明寺の。故院にかへり玉ふ。其間七日七夜渉口に。自然の甘露をなめたまへは。飢ずさむからず。雨にもぬれ玉はず。かへりたまふ。さそが佛力はいひあがら。和漢とも。ためしそくなき事共之。此と法道（法道）和尙の記よくはしくあらはれけるとこさるほむに。空海和尙渡天ありて後も又西明寺の故院にすませ玉ひけるがいよく求法の侈心（侈心）さしふかくましくてこの山々かしの里々をめぐりて淨法の師をもとめありき玉ひしよ青龍寺の惠果和尙と申せ人ましくける此和尙と申たてまつるは大興善寺不空三藏の淨弟子よてしんでんの大祖大日如來より一葉の嫡弟ありされば二代のみかどもくはん

ぢやうをうけたまひ。四輩しはいの弟子でしも密藏みつぞうをならふ徳行とくぎょうともにならりて。人天にんてんの師しといふへき人ありし。空海くうかい此事このことをきいたまひて西明寺さいめいじの僧志明談勝そうしめいたんしょう等の五六人の僧たちをともあひ青龍寺せいりゆうじ惠果和尙ゑいこわじやうのもとにまふて玉たまひしかば和尙空海わじやうくうかいをつくづく見玉みたまひて浄じやうるみをおくみのたまひける。われ此このとしてろなんぢが来る事をしりておひまつとひさし来る事なふどておろかりしけふしもあひ侍る事大きなさいはひにあらすやとて。すいきの涙なみだにむせかへり玉たまてやゝありてのたまへるは

わがいのちすでにかざりあればやうやくつきなんどす。大法ほうぼうをつたふるにさらふ人あしかんちすみやかに香花かうけをとのへて灌頂くわんていの壇だんに入玉いりたまへのたまひければ。みる人舌したをふるひ聞きもの耳みみをおとろかし。さしも日本のしやもんは權化ごんげなりとはきこしかど。いまた一めもしり玉たまのぬ。惠果和尙ゑいこわじやうにまみぬ玉たまは和尙わじやうつぶさに淨付法じやうけほうの事をのたまひ。とし頃此人このひとを御まぢありしとの浄じやうとほとけのへんげとはいひながらまのまへにかゝるふしぎなると共たいあらずと思はれければ空海くうかいくわんぢやうし玉たまはん事を浄じやうよろこびましくて。香花かうけをとのへ道場だうじやうをかざりたまひて。六月上旬ろくがつじやうかんに胎藏たいざうのくはんぢやうをかけたまひ。七月上

旬じゆんに金剛界こんごうがいの職位しむいをうけ。八月上はつがつじやうかんに傳法阿闍梨てんぽうあせりの灌頂くわんていをうけたまひける。此時五百の僧そうの齋會さいかいをまうけておまねく四衆しじゆにほとことし給ひしかば。青龍寺せいりゆうじ大興善寺だいこうぜんじの大徳だいとくみなそのむしろにのそんで。ことごとくよろこび法式ほうしきをたそけおはしましけり。其後そのち五部ごぶの眞言まごん諸尊しよそんの密契みつけい梵字ぼんじ諸等しよとうことごとくまなび給ひてのころきこころきこゑけるなべての人の月つきをむかへとしをわたりてあらへるばかりの法ほふをもわづかのまにつたへり一ひとを聞きて十じゆの道理だうりをおきらめたまふまことに人間にんげんのわざとのおもはれず。さればにや。吳殷ごいんが蘇すよいへるも。このしやもんこれ凡人たふじんよはあらず。三地さんちのぼさつのげげんあり。内うちには大乘だいじやうのころを秘ひし。外そとには小國せうこくの沙門さもんの相さうをしめし給ふと賞しょうみせしむ實じつにさる事こととぞきこゑける。又また空海くうかいみづからも。三地さんちのぼさつのけしんなりとのたまひしこと有あるかや。かくて淨受じやうじゆ法ほふあるべしける由よしをさねむ人有にんあ。是こゝは惠果ゑいこの淨相じやうさう弟子でし順曉じゆんげう阿闍利あせりの弟子でし玉たま照じやう寺じの珍寶ちんぼうとや僧そうにてぞ有ける。日本のしやもん空海くうかいとやらんにのこりなく浄じやうじゆほふましますこといと心こゝろいたく口くちたしくたもひて。和尙わじやうにやされけるは日本の座主ざすたとひ聖人せいじんありとても門徒もんたよもあらぬ人なり。まして異國いこくの人ひとなるに淨門徒じやうもんたのしたしき淨弟子じやうでしをさ

しをきたまひて此人に一大事をつたへ給はんこと心得かたしたと顯教をさづけ給ふべし。あんぞたやすく密教をさづけ給はんやとさま〜にいさめやされしこと度々ありしかど。和尚あへて聞も入給はず。いよ〜ひみつをばさうでんましくける。珍寶あるよの夢も四天王こくうよりとびきたり給ひて佛菩薩の夢でんばふをさまたぐる事大罪のものあり。といかれる眼を見出し其聲天地もくづるゝばかりにがうぶくし給へは珍寶五昧に汗をながし九竅に血をそゝひて夢はすなひち覺にけり。其あしたにいそぎ空海の御寺よまひり禮拜してつゝしんでやけるは

われ此あひだ聖人の夢傳法をそねみさまたげけるにやこよひ四天王のせめをうけ命をどられんとすわがふるかあるあくしんのいたすところなり。いまよりその心をひるがへし聖人よきふくやたてまつるべし。此咎をゆるし給へどくはしくさんげやけるとこ又我朝南京の山階寺にしゆひんろうつといふ人有けり年戒共にたけて薰修日つもりたりければ事にふれて空海の名望をうねみたてまつり。はる〜の渡海求法あそべすことあるをいかなるとか傳へたまはんと心もとあしとて頼守敏唐土へ護法をつかりして傳法の次第をさかせ

ける。和尚胎藏の法を傳へさづかり給ふ時かの護法淨堂の戒壇のほどりよ來り立聞してはやく山階寺にかへり守敏にくいしく語りける。空海もとより神通力あれば。これをしろうしめされてのちの金剛界の大法をさづからせたまふときはこれに盜法のもの立聞をいたすあり。さらば結界せんとて。やがて室内をふうじて魔の出入をさやうにしたまへ。かの護法もあつれをあしてちかづき奉る事なくむなしくかへりしとかやありがたかりしつうりさかな。かゝるさまたげどもあはかりしかども。もとより。こんじやの淨身あれば。のこらず。大秘法をもをつたへさづかり給ひけり。さて淨受法の師惠果和尚日を經月をこえて淨遷化の期やうやくちかづきけれり。師資相傳の物ども。ことごとく空海に附屬し給ひけり。和尚のたまひけるに。此兩部の大法一百余部の金剛乘の法および三藏傳付の物あらびに供養の具等なんち頂戴して海内よるてんすべしと。淨遺誠し給ひければ。空海尊命有かたくなばしめしさづかり給ふ所のものたほき中にも佛舍利八粒のうち命色の舍利一粒。鍵陀駝子の袈裟其外みなこれ傳法印信万生の歸依ある物あれ。一つもかるからざる物ども也。空海有がたくもかゝる大寶物をてんじゆし給ひて日本につたへといめ國のまもりとあ

し給ふ事。善行方便あれり。おろかなる人のやすはれりしかと。うやまひたつとせ
 き事共也。さて和尚すでに修ようめつしたまへんと見ゆけるが。空海をめぐつげたまひ
 けるは。われいま此土のねん盡て命をどいむる事あたらずさればつたふるところの金剛界
 大悲胎藏此南部の大教のしよぶつのはつひさうのみのりにして即身成佛の徑路あり。いざ法
 界につたれて一切しゆじやうをさいとせん事をねがふなり
 河凌の辨弘と新羅の恵日とは胎藏の師位をさづく。劍南の惟上と河北の義圓とは。金
 剛界の大法をつたへ義明供奉には。兩部の大法を授く。いまなんぢよ。兩部秘奥檀儀印
 契演梵たがふことなく。とくくさづけをはんぬ。たを瓶をうつそがごとし。日のいつ
 る時に。月入。油つきぬれば。ともしひきゆるはつねのとおり。ぼさつともいまる事
 あり。如來もそでよめつし給ふ。我も又眞に歸しんはるかになんぢがきたるをみて。命の
 たねん事をあられしに。いまなんぢを待てて心にのこるところをく大法をつたへしと。ひ
 どへに。ほどけの修たすけにあづかりけるゆへなり。我つねのねんぐりん。すでにたりぬ此
 秘法をあんち天下に弘めて。つみあるもつみあるも。あまなく一切のしゆじやうを。さいと

し給へ。しからは佛恩師徳をもほうするならん。義明供奉のこへにしてつたへ。なんぢの
 東につたふべしさづかる法をたつとび。よくたまち給へ。ゆめくねろそかにしたまふな
 ど。ねんごろに遺告ましくして唐永貞元年十二月十五日に蘭湯にあかをすゞぎ。手に法
 印をひすびて右脇にして。つねに圓寂にふし給ひぬ。時に修年六十とかや。日本の延暦二
 十四年にあたれりされば空海をはじめたてまつり。青龍寺大興善寺の學徒そのほか見聞の
 ともからにいたるまで。わかれをかあしひ。徳をしたふありさま。かの叢林にて世尊修よ
 うめつのいにしへ心あるも心をきまげきかあしめるありさまも今のあげさにたぐへつゝ
 悲歎の袖をしぼりける

ろも。此和尚と申のみかどには修師範なり。國のためには父母なり。一天下の貴賤あけ
 きかあしむることはりにすすきたり。實とよ草木までもかあしひの色を合みけり。しかる
 ようの修にうめつまし。ける夜在かたかりしふしぎの修つけありてけり。空海修かなし
 ひのあまりに道場に入給ひて紅涙を三衣の修たもとにつゝみ。あまり丹誠を修心のろこに
 こらし玉ひて。よもすから修持念おこたらすまし。けるよ。よもしんかうよあよび人し

つまりてのち。かすかなるをもしびのかけより。和尚宛然として。空海の法まへにげんじ
たせ給ふ。その法すがたひかりをはきつてかけのごとくよそをたがはれさせたまひてける。
ゆめにもあらぬ。うつゝにもあらぬ心ほれたるがごとくして。たゞばうせんとまもりぬた
まひて。一たびはかきしみ一たびはよろこびかうべを地につけ。らいし給ふ處よ。和尚よ
ろこばしげある法はいろよてのたまひけるは。あんぢいまだあり給ひすや。あんぢと我
と契りの深き事を。あほくしやうをうけしうちにあひともにかかひねがひしは。此秘藏の
法をひろめんとなり

さればこゝかしこにしてかはるゝ師資となりし事一兩度のみならず。此ゆへにあんぢに
すゝめてわがひさうの法をさづく。受法こゝにたはんぬ我つねにわがひしと又たりぬ。あ
んぢ西土よして。我足をせつす。我また東土にむまれてあんぢが室にいたらん。ひさしく
此土よとまざる事なかれ。われさまにさうりあん。どのたまひて。かきけすやうに。うせ玉ひけ
り。空海法よろこひのなみだに。むせびて實にありがたかりしと事共あり。生々世々に師
資のちぢりあさからざる事のようにばこゝよと。こゝにたうとくたばしめして。うよゝし

くはんねんふかかりし。さてかくてもあらぬわざなれば。つぎの年の正月月中旬に法さう
くのさしきおごうかにして法からを都の。ひがしにあたりし。けはしき山にをくりて。
法はかきつぎげり。空海法なげきのあまりに碑の銘をつくらせ玉ひて。法影のかたはら
にたて給ひ。師徳のたつとまことをあらにし。法法恩を報したまひしかば。見聞の人此銘
をながみ見て。かんにたへすといふ事あり。まどにこんげの法筆たてとはいひながら。も
んじたまをわしらし筆力。花をそく文牒耳目をおどろかさるはあかりし。ろの碑の銘の
たくよいはく

生也無邊 行願莫極 麗天臨水 分影万億 爰有三挺生一人形佛の識
毘尼密藏 吞并餘力 修多與論 牢籠胸憶 四分乘法 三密加持
國師三代 萬類依之 下雨止雨 不日即時 所化緣盡 怕焉師眞
惠炬已滅 法雷何春 梁木摧矣 痛哉苦哉 松壇封閉 何劫更開
と云々
さてろの銘の文にあろはしけるは

來非^レ我力^ニ歸非^ニ我志^一招^レ我以^レ鉤引^レ我以^レ索^一泛^レ舶之^一朝^ニ敷^ニ示^レ異相^一
 飯^レ帆之^一夕^ニ纒^レ說^ニ宿緣^一進^レ退^ニ非^ニ我能^レ去^レ留^一隨^ニ我師^一孔^ニ宣^レ雖^レ泥^ニ異^レ性^一之^一
 說^一而^レ妙^ニ懂^レ說^ニ金^一鼓^レ之^一夢^ニ所以^レ舉^ニ一^レ隅^ニ示^ニ同^レ門^一者^也とかくあんなるべしけ
 れい。見る人さく人中けるはたつときかあ菩薩^ハ大士^ノの伊方便^ニにして。いつはれる伊かたち
 をげんじ。かりに三界^ハ五趣^ノの間にあつたまひて伊法^ヲをひろめしゆじやうをすくいたまふ
 事。ごんげ分身^ノの有さま。みなかくのごとしとたうとまざるはあかりけり。かくて空海お
 ぼしめしけるい。いまのはやねばしめしのこと給ふともなく。一々伊のそみはかなひつこ
 とに和尙^ノかりにあらはれはやく本國^ニにかへりて伊つたへの法^ヲをひろめ給へとの伊つげあ
 りしなれば。さらし歸朝^有べしとて。みかどへ參内^ましめて歸朝^し給へんよしをうらも
 んし給ひけれい。みかど伊わかれをおしみ給ひて。ひたすら此土^ニにとまりたまへ。伊和
 尙^ノを師範^とあふぎたてまつらんと思ひしに。早歸^てうし給へんとよと伊なげきありしかハ
 空海^ノたまひけるい。ちよくめいをそむくとおられおれとも。われ大法^ヲをあづかりたてま
 つり。ひがしにかへりて。此密教^ヲを片國^ニにひろめむとすき給ひし。わが師惠果^大和尙^ニにか

たくちざりしとに侍れバ。伊いとまたまはり。國にかへり中たきよしかさねてさうし給へ
 バみかどもめたくしあらぬ伊事^ヲあれバ。伊あごりたしくはねばしめしけれ共。といめたて
 まつるも法^ヲをえんためあるに。かへつて法^ヲをさまたぐるもいかいなれば。後年^ヲをまちてあ
 ひ奉らん去^ちながら。朕^ノか年^ヲをかばこねたり。さて海路^ハはるかに雲天^萬里^ヲあれバ。こんじや
 うにかさねてあひたてまつらんとたよびかたし。ねがはくは一期^ノの後^ニかならず佛言^ニにおひ
 たてまつるべしと。かたく伊けいやくましくて。菩提子^ノの伊ゆずを取^りいだし給ふて。
 空海^ノ和尙^ニたてまつり。恩勅^ニのたまひけるは。このたてまつる。じゆずい。朕^ノかかたみ
 としてもち給ひて。あかく朕^ヲをわするゝとあかれと伊涙^ト共^ニに伊いとまごひありしかハ空
 海^ノうやまいて。かの伊ゆずをいたいき。心^ハ帝^ニにたまれ共。内裏^ヲを立出^{させ}たまひけり
 さてかのじゆずを。あかく伊身^ニにしたがへて。國にかへり給ひても。常^ニにつまぐりもち給
 ふが。いまにつたへて東寺^ニにおさまり。たからとそなりにけるさてみかどに伊いとまごひ
 有ける比^ハ元和^元年の八月^トかや。日本の大同^元年にあたりしあり。掇明^州のつと云所に
 うち出玉^ひふあよろほひまししけるに。貴賤^ヲ伊なりををしみたてまつり。僧俗^ヲちまた

に市をふしてたくり奉りけり。已に舟のともづなをとかんとしけるとき。空海人々に
 りとせごひましくてのち。磯へにたち給ひて。東の方よむかつて持念あつての玉ひけ
 るは。我つたへさつかりたてまつる所の。大法密教流布相應の勝地あらん此三結われより
 さきに我國にとび行て。木末にかゝりて我をまつべしとてもち給ひける。三結を日本のか
 たへなげさせ給へばはるかこのくうにとびあがり。雲のうへにあらはれて日本のかたとた
 ぼしきかたへとびゆきけり。いたりぬん所しらざれ共。願力のむあしからざる事をあら
 ばし給ふそ有がたけれまのあたりこれを見る人々かんせざるのなかりしとかや。まことに
 ありがたきことどもこ。いにしへ淮南の犬たちまち天にのぼりしとふしぎの思ひををしける。
 ろれり一たんの仙術にて益なきことありいま金剛の杵のるかにこくうをかけりて和尙の尊
 命よしたがふと皆是三密の加持あふぐべきことならずや。さて舟ふねにめし。万里の海路に
 おもむきたまひける。佛神の擁護ましますせよとゆゆに帆をあけて二月月をへていざ
 かの伊つともなく伊歸朝ましくてつくしたつき給ひけり此時伊年卅三ありしとかや
 在唐ありさきさきととも三年をへて。まづのぞんじゆもあまた傳へて御かへり在し。

もろこしの元和元年八月に伊ふもそのひし給て同じき年の十月下旬に。伊歸朝此時は日本
 人王五十一代。平城天皇の伊う大同元年にあたりし也。其年は月日の余りもすくなく空吹
 かせもしつかあらず。たひやの雪も冷まされれば伊身はつくし。くはんおんじにとんずりあ
 たらをこたるべきにあらざれつ。まつさつかりきたり給ふところのものどもは。太宰大監
 高階の真人選成に仰て上奏させ。ろのとしは。つくしにて暮にけり。さて上奏の物は。
 新譯の經をへて一百四十二部梵字真言の讚等すべて四十二部論章等すべて三十二部佛菩薩
 天等の像一十鋪道具九種阿闍梨付屬の物十三種ありと奏しければ。見かぞゆないかんあ
 めあらずして。天下に流布すべきよし宣旨ありしとかや。かんのこもく奏聞あつて。和尙
 ちその明る年都に入らせ給ひしと也
 大同元年も。つくし觀音寺にて暮らせ給ひ。新玉の春にも成しかば。急ぎ都へのぼり給ひ
 しが去ぬる。延暦二十三年に。入唐の伊ころざしたてりし時。鎮西にて。宇佐の大明神
 をはじめたてまつり。もろくの神祇ふ伊祈誓をまして。渡海安穩とたのみたてまつらせ
 給ひし時。豐前國。資春の明神の託じてのたまひけるは。聖人法をまもくし。命ぞかる

に市をふしてたくり奉りけり。己に舟のともづなをとかんとしけるとき。空海人づくにいとまごひましくてのち。磯べにたち給ひて。東の方よむかつて持念あつての玉ひけるは。我つたへさつかりたてまつる所の。大法密教流布相應の勝地あらん此三結われよりさきに我國にとび行て。木末にかゝりて我をまつべしとてもち給ひける。三結を日本のかたへなげさせ給へばはるかのこくうにとびあがり。雲のうへにあらはれて日本のかたとたほしきかたへとびゆきけり。いたりぬん所のしらざれ共。願力のむふしからざる事をあらはし給ふそ有がたけれまのあたりにこれを見る人々かんぜざるのなかりしとかや。またにありがたきとせよ。いにしへ淮南の犬たちまち天にのぼりしとふしぎの思ひををしける。うれの一人の仙術にて益なきことありいま金剛の杵なるかにこくうをかけりて和尙の尊命よしたかふと皆是三密の加持あふぐべきことならずや。さて舟にめし。万里の海路におもむきたまひける。佛神の擁護ましませまじゆんぶうに帆をあけて二月月をへていざかの舟つゝがもなく舟歸朝ましくてつくしにつき給ひけり此時舟年卅三ありしとかや在唐あふささるさとも三年をへて。さまぐのどんじゆどもあまた傳へて御かへり在し。

もろこしの元和元年八月に舟ふあよそひし給て同じき年の十月下旬に。舟歸朝此時は日本人王五十一代。平城天皇の舟う大同元年にあたりし也。其年は月日の余りもすくなく空吹かぜもしづかならず。たひやの雪も冷ましければ舟身はつくし。くはんおんじにぞまなりあがらをとたるべきにあらざれ。まつさつかりさたり給ふところのものどもは。太宰大監高階の真人遠成に仰て上奏せさせ。ろのとしは。つくしにて暮にけり。さて上奏の物は。新譯の經とて二百四十二部梵字真言の讚等すべて四十二部論章等すべて三十二部佛菩薩天等の像一十部道具九種阿闍梨付属の物十三種ありと奏しければ。見かぞゆぬいかなるめあらずして。天下よ流布すべきよし宣旨ありしとかや。かくのごとく奏聞あつて。和尙えその明る年都に入らせ給ひしと也大同元年も。つくし観音寺にて暮させ給ひ。新玉の春にも成しかば。急ぎ都へのぼり給ひしが去ぬる。延暦二十三年に。入唐の舟ころざしたこりし時。鎮西にて。宇佐の大明神をはじめたてまつり。もろくの神祇舟祈誓をあして。渡海安穩とたのみたてまつらせ給ひし時。豊前の國。賀春の明神の託してのたまひけるは。聖人法をおもくし。命をかる

くおもひて。求法のために。はるぐの。海路におもむき。もろこしにわたり給はん事いとありがたし。しからばわれも聖人に立ちひつゝ。いづくまでも。をしわたり。求法をまもるべしとの滂せいぐわんありしかば。聖人よろこばしくたほしめして。渡唐ありしがとゆへなく。大法傳受滂心のまゝにして。露計のさまたげもあく。滂歸朝ありし事。此滂神の滂まもりめありと。ありかたくてわすれたまへねば。まづ豊前の國へいたり給ひて。賀春の大明神へまいり。滂寶前にて。のたまひけるは。佛法護持のために。われはるぐと。万里の波をわたり今本郷に歸り。ことに大法をつたはりたる事。ひとへに明神の滂加護あり。よろこばしき事。心肝にろみけるいま此御山を見るに。岩石たかくたゝみて。草木あふる事あり。われ此山に草木を生じて。たてまつるべしとのたまへば。明神ことに滂納受のけしきあらはれて。滂麗もゆるぎ。縉帳もうごひて。滂よろこびのよしをしめし給ひけり。扱和尚香水を滂加持ましくて。かのかはけるがんせきたゝみし山にうゝぎ給へば。にんかに草も木もあひまげりて。岩石たちまちに水をくうるはしき山とぞありにける。千株万株の松のみどりけ。たねなくて。岩根ぞしげり。南枝北枝の花いろへ。うへざるにか

うひしくて。神徳をあらはす。鄧林のこずゑもかくばかりやあるへきとるみへし。ろのうち。いよゝ山のうるはしくて。いまの代までもしげ山にて侍るとかや。かくて道すがら。宇佐の大明神にまいり。こゝかしの神社佛閣にまふで。みやこより上りつき給ひしかば。さづかりきまじ給ふところの。經論道具等を一卷。の書にしるして。表をたてまつり。ろうもん申給ふ。其滂とばよいはく入唐學法の沙門。空海中さ。去ぬる延暦廿三年をもつて。命を留學のするにふくんで。律を万里の外に問。青龍寺の灌頂阿闍梨にあひたてまつりて。師主とし時行膝歩して。いまだあらはざるところをあらひ。かうべをかたふけ。滂足をさへげて。いまだきかざるところをさく。さいわひに國家の大道をたのみ。大師の恩慈をかふむりて。兩部の大法をまなび。諸尊の瑜伽をあらふ。此法はすなはち諸佛の肝心成佛のみちなり。國にあそらふれば。城廓。人にたくらぶれば。膏腴也。かるがゆへ。薄命のものは。名をたにさかず。重垢のものは。いふことあたはず。印度には。輸婆三藏負衣を脱躡し震旦には玄宗皇帝景仰して。味を忘る密藏の宗是より帝と稱せられ。半珠の顯教旗をさびか

うのしくて。神徳をあらわす。鄧林のことおもかくばかりやうなるへきとみへど。ひの
うち。いよ／＼山のうるはしくて。いまの代までもしげ山にて侍るとかや。
かくて道すがら。宇佐の大明神にまいり。こゝかしの神社佛閣にまふで。みやこより上り
つき給ひしかは。さづめりさまし給ふところの。經論道具等を一卷の書にしるして。表
をたてまつり。うゑもんや給ふ。其後とばよいはく
入唐學法の沙門。空海やさく。去ぬる延暦廿三年をもつて。命を留學のするにふくんで。
律を万里の外に問。青龍寺の灌頂阿闍梨にあひたてまつりて。師主とし時行膝歩して。
いまださらはざるどころをあらひ。かうへをかたふげ。侈足をさくげで。いまださか
るところをきく。さしめひに國家の大道をたのみ。大師の恩慈をかふむりて。兩部の大
法をまなび。諸尊の瑜伽をあらふ。此法はすなはち諸佛の開心成佛のみちなり。國にあ
そらふれば。城廓。人にたくらふれば。膏腴也。かるがゆへよ。薄命のものは。名をた
にさかず。重垢のものは。いることあたはず。印度には。輸婆三藏負衣を脱離し震旦に
は玄宗皇帝景仰して。味と出る密藏の宗是より帝と稱せられ。半珠の顯教旗をさびか

きて面縛せらるると云々如此奏問まじくけられ。帝を始奉り。公卿殿上人皆がんになへ
 てまじくける。空海をみやこぢかくの修庵室にまきたてまつり。つねにみかどよりめして。修
 法をまこしめしける。ある時和尙の修住坊へ勅使きたり給ふに。折ふし和尙。西のかたよ
 むかつて。三たび水をうゑ給ふ。ちよくしはゆへをどひたてまつらるゝに和尙こたへた
 まはくたい今大唐國裡の青龍寺に火災の事有。さればわれをすくはんために。これより水
 をうゑ侍ると。のたまへば。ちよくし。まゐのたもひをなして。まもりおければそゝぎ
 たまふ水。たちまち雨雲となりて。西のかたをさして。どぶがごとくにゆきしかば。ちよ
 くしも。さもあらんと。かんにたへられけるが。そののち。もろこしより。書をおくりて。
 何月いく日は。青龍寺の經藏に火難ありしに。ひがしの方より。にはかに大雨ふりきたり
 て。これをけして。其あんをすくひけると。つたへしかばかのちよくしを。はじめ見きく
 人おどろかさるはあかりし。さて其後。嵯峨天皇の修宇。弘仁元年に。和尙いかりおほしめしけん。河内國の靈所よ修道

場をたてさせ給ひて。百ヶ日をかきりて。聖徳太子の修場所よまふで給ひぬ。うの九十六
 日と申す夜。修廟のまへに下。ねんころに。修法施まじくして。しづかに。たゞ一人く
 んねんして。座し給ふ。夜いたうふけてのち。いつれの方とも聞さだめかたく。大般若の
 理趣分を誦するものあり。其ころたはある事かれうびんが。の如し。和尙いとふしんにた
 ほしめし。しばらく修念持まつてのたまひける。此微妙のころは。いかなる人のあそわ
 ざそや。ねがひくはわれにしめし給へどありしか。かの修廟屈のまへに。たちまちぐ
 うみやうをはまつて。其ひかりのあかより聲まつてのたまひく。我はこれ救世くはおん
 の垂迹あり。しゆじやうをりやくせんがために。案養世界をすて。いま此穢土よ來れり
 わが母后の本師阿彌陀佛の化身也わがさきは。大勢至菩薩の垂迹なり。三尊ちぎりをむ
 んで。三骨を一廟におさむ。守屋か邪見をくだき。佛法のいとくをあらはし。四十六所に
 伽藍をたて。一千二百餘人の僧尼を化度せり。悪をたち。善をしゆするの道やうやくみ
 ちたりどのたまひてより。勝鬘等の大乘の要文をときたまひければ和尙ことよ有かたくよ
 るこはしくおもひてのたまひけるは。われいま。まのおたりに。佛をまがみ奉まつ所の例

説法をうけ給はる事よ。われ此見佛聞法の方によつて。第三發光地を證すと。のたまひしとかや。されり此和尚を三地のほさつとせしことは。唐朝にてもありしかと。みづから。かくのたまひし事は。此時ありしかや
 其頃南都の東大寺にふしぎなる事ころ侍りけれおほきさ。五六寸のかりの蜂たほくあつたり。人をさす事はあつたし此蜂にあふものたましおをうしなひ。さるものは。たち所に死す。されば法をまもる僧の。命ちをかくしてなを寺に住せといへども。身をかしむともからん寺をすて。いつくともなくまよひ出ければ。たのつから學業すたれて。法命たちまちたぬむとす。いかなる大魔縁がかゝる蜂とは變じけるよと。みきく人ありれかあしまざるはなかりけり。此寺とすは。聖武天皇の淨願佛法さかりにして。年や久し。まことに天下國家の淨まよりのため。淨建立ありし淨寺あれ。かゝるふしぎある事。天下の人膽をひやさいるのよし。帝此とをえい聞有て。入唐の和尚を此寺の別當に補せしめよと。みとのり有。すあち和尚彼寺よ入らせ給ひて。淨加持まます迄もあく。數万の蜂共皆和尚におそれて。いつく共あくにけ去けり。いか様天魔の所爲とみねし。其後あちら

せたる僧達。とく歸山中て和尚をうやまひ。學業おこたる事あく。つとめとげみける和尚あはらく東大寺に住し給ひしが。又みやこに淨のぼりあつて。淨じゆほうまじくけるるところの眞言秘密のをしへをそひろめ給ひける。抑々此法とすは。如來の淨秘密諸佛の淨内證にして。即身成佛の旨をのたまひ。國をおさめ。人を利する事。七宗にてたたるよしをうらもんし給ふ。此時顯綱にかゝりて。密教の法水をあめざる諸宗の學徒あらむひをなして。これをゆるさず。夏のむしの氷をうたがへるかごとし。かゝりしかば空海和尚をめされ。さて諸宗の名徳をめて。清涼殿におひて。あの一我宗のふかきむねを論ぜさせ給ひける。法相には源仁。三論には道昌。天台には義真。華嚴には。道雄かれもこれ。その時の名知識されば。天をおろかすばかりと。あるひは。五性八不のほこさきをど、のへて。論難をあらうひ。あるひは。三論十支の陣をいつて。勝負を決せんぞと。諸宗を敵として。空海和尚ひとり頓覺成佛のふかきむねを給ふ。辨才の泉をわかじ。ふるなの辯舌にもすぎ。智恵のともしび。ひかりあきらかにして。釋尊の示現し給ふかどうたがはる。頓覺の旨。文義こゝにあらはれ。神通の教深理あらたまきはまる。まことに最

上乘のねもひき。諸宗よごえたりし事とはきこへしか共。なを即身成佛の道。おのこら
 たがひしげにみはげれば。空海王の眞實の證をあらはししめし給はんとして。南に向て修心
 に修くらんねんあり。修手には大日の印を結ばせ給ふに。父母所生の肉身たちまちへん
 じて。金色の大毘盧遮那佛となり給ひて。かうべよは五佛の寶冠をいたしき。修身のうち
 より。こんじきのひかりを放つて。禁闕にかうやき。穢土を出たせしめて。浄土の相を
 あらはし。凡身を捨すして。佛身を現じ給へり。しかれば。主上も修席をとりて。禮をお
 し給ひ。諸臣もかうべをたれて拜みうやまひ。諸宗の賢哲疑謗の舌をまら。隨喜の掌を
 合せけり。見聞し人。皆身の毛もよたつて涙をながして貴ける。和尚しらくあつて。本
 のかたち成給ひて。生佛不二ある旨をわらひし給へり。満座の諸宗とはぎくて。只和尚
 を禮拜してころ立れけれ。其のち眞言を七宗の最上とせし給ふ。されば諸智識の中に。空
 海和尚を。帝の修師とあふを奉り。修師依ふかくましくけり。法敵の諸僧も。皆々和尚
 の門徒と成て。秘密の深法を承りて。くらんぢやうのたんふ留けり。眞言のいみしかりしこ
 と。わか朝にはこれそはしめありける。

さて修心は。さしめし修じゆつけましくける本縁をほしめし出されて。さつみの國。
 極尾山に。のほりしはし止住したまひけり。此極尾山とせせば。しせんは。地がはける所
 にて水いと。とほじかりじ。ある時和尚修手水をつかひ給はんとおほしめしけるよ。水い
 ごとくあかりしかば。修寺のまへにありて。檜木の葉を修取あつて。修手をすり滑め。
 柴手水とあそばし。そなる。椿の木すゑにあけかけ給ひて。我々のんはたしとぐへくは。
 此木の葉。これなるつばきの葉だは寄生とあるよしとのたまへり。さしめし似つかぬひの
 木の葉。つばきのこすゑに生つきて枝をかはし。葉をまじへて。今の代までもかれうせず
 ありて。柴手水と號しける。されば和尚水なくはかあはじとて。修寺のまへにたすみ
 給ひ。しばらく神呪を誦し。平地に修加持ありしかばたちまちいざよき水がき出て。い
 かき早にもかはく事なく。あかくしたるりて。いまたたぬすたりたり。名つけて智慧水
 といへり。此水をむすべり。三解脱門の月。ひかりをうかべ。かの樹に觸れば。五分法身
 の風。にほひごろふとやかや。此所に至る人。たれか巨益をうけさらんや。
 しばらく此地に。まごあひすまして。ものうち。また山じうの國。たか山へのほりたま

ひける。さて弘仁三年十一月十五日。神護寺年におひて。はじめて。金剛界のくはんぢやう
 たんをひらひて。道俗の衆にさづけたまひける。傳教大師受者の上首として。これをうけ
 たまふ。たなじま十二月十四日。たいごうかひのくわんぢやうをまこきひたまふ。傳教ま
 たねなしくこれをうけたまふ。受者總して。一百十五人ありしかや。兩部定惠の。くわ
 んぢやう此ときはじめつたはりける。傳教和尚そのうち弘仁四年。正月に。圓澄和尚
 をもつて。空海の弟弟子にまいらたまひければ空海師弟のけいやくわさからずまし
 くて受法の弟子最澄とぞ。あうはされける。この事世々に傳教の空海の弟弟子よあらず
 あとといふ人あほかめれ共。さにはあらず。まつたいの根濁にして。人々偏執をさきと
 し。とがの上よとがをおらほし。ともこれをおさける。かきむべし。あうるべし。い
 にしへの。世もすなほに。人のこころも幽玄をりけるにや。徳あるは徳をしりたがひにこ
 れをたつとひたまひしとかやかれはほまけ。これいほまつ。師とあり。弟子となる。秋家
 のへたてあしとしるべし。さて空海和尚のいよく密教をさかんにひろめたまひて。高
 雄の神護寺よおはしましける。



らんと。のたまひければちよくし。まことしからず。たもひ給へども。たほせにしたがひみ
 ばやとて。かくぞさへげて。川ぎしにたくれける其時和尙大さある筆ふ墨をふくませ。給
 ひて。はるかある川のむかひにもちたるかくにむかひて書たまふに。其すみ。きりのとく
 にして。川むかひの額のおもてにふりかゝるとみへけるがたちまじ額に金剛定寺の四字垂
 露の點あざやかにあらはれて。入木のいきほひみだるゝ事なく。文字すはりければ。ちよく
 しこれを見て希有のおもひをあして立かへりみかどへ。しかくとううしやされければ。
 傍感あゝめならず此人はどかく人間にてはあるへからそと。いとありがたくたほしめし。
 いよく傍歸依あさからすましへければ。つたへきくほとの人。かんにたへ有がたき。
 ひじりなりと。あがめたつとはさるゝあかりしどかや
 かくて大師大和國久米寺にくたり給ひて。善無畏所説の疏に付て大日經を講し給ひける。
 これ傍夢のつけにより彼寺の東塔のもとにして。つとめて此經を得たまひしゆへよ。此の
 恩を報じ給ふべきよしにや侍りけん。そのとき伊勢大神宮をはじめたてまつり。日本國の
 大小の神祇。本地垂迹の多かたちをあらはしたまひて。傍ちやうもん 隨喜し給ひけると

かや。しかれの大師の傍修法眞言の秘奥神明すてに納受をたれ給ふ。人倫としてたれかあ
 ふぞ信仰したてまつらざらむや。うのち東大寺の中門を大師傍一人すささせたまふに。
 人一人門のほとりにたゝすみおけり。そのけしきたゝ人とは見ぬす。光明かゝやきありが
 たき傍ふせひなり。大師あやしくおぼしめし。いがある傍かたにてましへけるとのたま
 ひければ
 かの人。いとこゝろよげあるありさすにて。われこれ八幡なり。われと和尙とは。かけ
 どかたつとのとくあり。わがあとをたるゝ所には。和尙かあらすはあれたまふべからず。
 又和尙のたはしまさむ所には。われかあらすあをたるべしと。かたく傍やくそくありて。
 どもに佛法をまもり。しゆじやうをいとしたまはんと。のちかひありしどかや。うもく
 八幡大菩薩は眞言上乘の高祖毘盧遮那覺王の應迹あり
 棧にしたかひ。時をはかりてあるひは釋迦佛とあらはれ。又ハ彌陀佛と現す。天づくよて
 善無畏三藏に對して密教をさづけしも我ありと。まさしく傍神託ありけるとあり。まこと
 に理智法身の依正一ぱらく表裏の名をかりつ。大日金薩の因果たがひに師資の徳をあらは

し。能所かはるし出てあるひはほどとし。又はさづかり。大菩薩と大師は分身なる事たれかしらんや。されハ大菩薩の本地釋迦如來の説よりハ。大師ハ靈山の聽衆あらんし又阿彌陀佛の説によらハ龍猛菩薩の妙雲如來すなハ彌陀善逝なり。しからハ八幡と大師と一昧なりし事あきらかあらざるや。又大師ハ觀音の所變ありしとあらはれたる事侍り湯川の玄圓菩薩の日本神仙記にいへるハ弘法大師ハ天竺にてハ勝鬘夫人とあらハれ。唐土にてハ。南岳大師と現じ日本にてハ聖德太子と現じ給ふ。これ皆觀世音菩薩の本迹にて。淨土穢土の權化也。かれといひ。これといひ。外用となりとせ共。もと一佛の分身之まことに無邊の神驗心詞にもたよびがたき事共なり。こゝに寶生山とて。日域無双の靈軸ありこれも。大和國なりし大師とに侈心をとゞめ。たまへり。万民の御命をすくハんがためハ。三國相承の重寶をたさめ。本尊海會彼軸に安置し入室の弟子を其所すましめ。天下國家のまもりとし給ふさればにや天照大神宮八幡大菩薩日夜に鎮護し給ふゆへハ一天の徳をおふき風雲の威つくる事なく。四海の益をほどこして。雨露の恩かざる事あり。水符陸地しるもしらぬも福田にやいなハれ動靜飛沈あけても恩澤にうるほひ侍りし

およろ奇機怖石の千象方形なることしげらくも。筆墨のかぎりにあらず。靈樹異草の大隱無名なる事。ことごとく塵俗のさかひをこぼたり。こゝろあらん人たれかあふぎたつとまさらんや。うのやまのふもとに。がらんあり。佛隆寺と名つけ僧徒すみていまの代までもつはら密教さかんよもてなすとあり

又ある時。閑院の左大臣冬嗣。大師にあひたてまつりて。我はこれ大職冠より。五代の後胤内宮の大臣の。三男也。昔八皇三十九代天智天皇の侈とき鎌足の内大臣藤原の姓をたまはりしより。代々の帝の侈うしろみとなり侍りしハ弘仁のころよいたりて。藤原の人わつかよ三四人ハかり。家の繁昌せん事いかゝあらんとやさせ給ひしかは。大師のたまひけるハ。山階寺の内ハ。南圓堂をたて給へ。しからの一家さかんあるへしとたはせられければ

冬嗣命のことく。南圓堂をこんりうし給ふ日ならすしていきしかは。すまはち大師を請し奉りて淨室供養ありしに。大師鎮壇ましくければ。かたじけなくも春日大明神ハたきなど。おらハれ出させ給ひて。いまださかハん北のふちなみとよみ給ひけるとかやかゝ

りしゆへにや。閑院の大臣の淳子忠仁公の皇帝の祖皇后の淳父として。攝政となり給へり
 我朝の攝政の此ときよりぞ。はじまりける。すべて一門のあかれひろく。皆百王の輔佐と
 あり給へり。今の代にいたるまで。攝政關白と中傳事ひとり此藤氏よりまりて。いまだ
 他家にわたらず。まとも春日の神恩あつうして。冬嗣の榮花をひらき給へる。たゞ是大
 師の淳方便の力あるべし其後御白河院の淳字にかの淳堂のかたはらに塔をたてらるべしと
 て地をひらかれるに。金銅の箱をほり出したるとあり。其宗の長者無観大僧都以下。諸家
 のしかるへき人々に勅問有けるに。すべて其子細をしる人あかりしに。遍知院の僧都鑑
 範一人彼箱の子細相承の秘決を勅して奉聞せられしにいさゝかたがふ事あかりけり希代の
 高名ありしとや

大師鎮壇の深秘小野一流の所傳といふ事世こそつてしらざらへなし。され大結界の中微の。
 金剛乘の源底あり。附法正嫡の外。その奥義をゆるしたまはず。餘流のたよばざる所也眞
 言の餘よこねたる事あきらか。其のち大師南山大峰修行ありける時。菩提心論釋摩河衍
 論等の聖教をみつから書たすふて靈巖の中にうつらせ給ひけり。かのみねの秘所まで今に

至るまで。故實の先達はつたへて是をぶがむ事にて侍る之役行者とこゝに淳ちきり深く
 していまの世までも役の行者高野へまいらせ給ふなり

かゝる時は靈香山にみちて奇光時よてらすと。かくて河内の國龍泉寺の。本願大臣伽
 藍を立んとし給ふに。此地の勝景心におひかなへりといへども往古よりつたはりたる大あ
 る池有て惡龍中にすみ。人民常に害をうけ村閭みな悲しみを含り。しかれハ大臣冠帯を着
 し劍笏をたゝしうして目しはらくもましろか池の底をみる事七日七夜に及へり。其時龍
 王人の形と現じていへるは。大臣名利の誓願をさしはさまんには。我なんぞをのゝかん。い
 かでか佛法の威験にしたがひさるへきやと。則本の形を顯らはし。震動雷電天地をひい
 しとびさりけり

それより池水涸渇して土石うるほひなく。水をへたつる事十余町。寺院を建立すといへど
 も。僧徒住居するにたへす。いかゞべきと大師ようかがひやされければ大師涸渇したる
 池に向ひて。しばらく淳加持ましませは本龍法味を感じて。忽に慈悲心をおこして舊池に
 歸り來て清き泉をわかしいだす。其ながれたらぬして。今に潺湲たり。しかるゆへに此寺

の名を龍泉寺と申しける事あり。かゝるふしぎのおほかりしかと。其後天王寺の西門。
 よして。日想觀をしゆしたまひし事。いとありかたかりし。にわかには海くもよつらあり
 赤日なみよ映して迷悟一如の觀たちまちにはがらかに。自覺本初のみなもとすみやかにひ
 らけて。五智のほうくはん頂上にあらはれ。三密の頓證眼前に掲焉たりしとかや
 ろれより和泉の國大鳥の郡よいたり給ふに道のかたはらに。一人の老嫗有て死したるむく
 ろをいただきよと歎きおたりけり大師あやしみ其由をたづね給ふに。たうきこたつていは
 くみづからは此里に年久しうすめるやもめ之此比此所に狼おほく出あまた人をなやましけ
 るが。みづからがた一人の男子もた今狼のために害せられ。あまりかあしきゆへ。あ
 げきゆとてむなしきしがひをいただきて天よあふぎ地にふしてこがれ居けり。大師不便にた
 ぼしめしすあへちしせる子のためにうせいの呪を誦し給へは彼男子たちまちよみがへり身
 心安穩しけり。老女親子もろとも大師を拜し奉りよろこび家にかへりける。其とき大師
 村をも加持し給へは其後は狼も出ず人をも害せず人民よろこび所もはんじやうと成けり。
 此事今に至るまで此里の物語りに傳へ侍るとこ

又住吉のうらを彦とほりありしよひとつのお大師をみたてまつりて吠けり。大師強にむか
 ひて。なんぢがころにまかすべしと仰せられけるを。弟弟子あやしみていかある事よて。
 さのたまふぞと問たまへば。ふるまき負債を辨すべしや。いあやとあくぞとのたまひけるどか
 り。かゝるちくるいのほゆるをたに。開しりたまふはありかたかりし樞者也
 又ある時大師はりまの國を修行し通り給ひしに。日くれければ。あやしげある家に立より
 ものはせ給ひて。一夜の宿をもとめさせ給ふが。内より老嫗出て。彦やとをまいらせ。鉢
 鉢に飯をもりて。大師を世養したてまつり。此女の中けるは。我へもと行基菩薩の弟弟子
 にてありし僧のいまた出家せざりし以前の妻なるが彼人僧にありたまふまきやをかれし。
 け。いつのどしのいつの日。菩薩きたりて。この家にやどり給ふべしと遺言し侍りしがわれ
 此日來手をあひ待しに。すてに今日にあたれり。日もやうやくかたふきければ。扱
 へ遺言たがひしよと。思ひしともはかまげれ。今彦付の來り給ふとの有難さよ。身いやしと
 いへ共忍菩薩に逢奉る事是ふひの甚き也と隨喜の涙をあがし。いたはりつゝすなはち
 飯をもりて奉りし鉢の。故ある鉢なればさづけたてまつるとまげられ。大師其の心さしを

かんじ。鐵鉢をうけ給て扱夜もあけ立出玉はんとしたまひけるが。彼がためにとて。かの家のはしらに。天地合の三字を書付て出させ給ひけり。其後かの三字はしらにふかくしみつき。いかにつれともききうせず。これをあらひて。其しるをもちゆれば。よろづのやまひ平愈せすといふ事なかりけり。さて彼てつはちをつたゑさせ給ひて。高野山にうたせめ給ひける今の影堂にこれあり。此鉢と申へ。釋尊涅槃の御供養に純陀が捧げたてまつりし鉢なりとぞ申傳へ侍る。扱そりまの國より。東國へ御修行有へしとて宇治川につかせ給ひて。舟にめされ。むかひのきしにいたりしかば。わたしもり舟賃をこひけれり。今身にしたかへる物なし。かさねてゑさすべしと仰られしかば。船人心やさしきものにて舟家にてゆへにあたひあくてもくるしからずとて。なをねんころにつかへたてまつりければ。空海ふなばたに船といふもん字を書付てゑさせ給ふ。此文字をこふ人あらば。代をゑてあたへよ。きどく有べしとて去たまふわたし守よろこび舟をしへのごとくけづりて人にあたへしかば諸病たちまぢいへにけり。往來の貴賤これをつたへきとて。手にくけつりもちひけるほどよ千たび百たびけ

づるといへ共跡より其あどあかりけり。もちへる人毎にあたひを送りけるほどよ。舟人たちまぢ万金を家にかさね侍るとぞ聞にけれ。られより。あふみの湖水のほとりへ立出させ給へり。まんくたるみつうみ。にひかにしらあみたかく鳴うごくしばらくゆらんじける處に。水上にさもうつくしき上らう一人たちおたり。あよものあるとのたまへば。われは是水神なり。和尚の福をもとめて。二世安樂をゑんために。是まであらはれてたると申せば。ゆくつをあたへさせ給ひてかれをすくひたまへり。水神履をいたゞきて。水底に入れる。あを近江路をとをらせ給ふに。ある山寺にゆきくれさせ給ひしが。たゞ一人の僧禪定に坐してあり。たちより一夜のやどりをし給ひ。よもすがらかたり給ふ。かの僧中けるへ。此てら里はなれたる山中あれは。あぶらをもとむるをえず。佛前にともしびをかゞげんとするに力なしねがはくい。和尚の法力を以て油をゑさしめ給へと請けれは。空海すあはち庵りちかき巖石にむかつて。しばらく加持まゝけれは。たちまぢあぶらわき出てあがる。事瀑布のしたゝるがごとし。日夜にたゆる事なく。うのいはりのつねのともしび。こ

ころのまゝに。かゝげけるも有り。然れ共たま〜利欲にふける者有て此油をくみ他所へも
 てゆき侍れりもとの水にぞ成けるとかや希代の上のふしきとぞ所の人は傳へたり
 さて奥州にいたり給ふに。しのぶのこほりといふ處に靈山寺といふ山寺あり。本願誰人と
 もしらす。すみおらしたる寺ありし。此山にひぐひんあほきゆへ。つねよかの寺のほとり
 物をさましけれ。いかはかりたつとま行者もすまおする事難くた。いたつらに年を経け
 れ。おれはてたり。おさゆふおとするものごと。あくまの狂するこゑのみよて。鳥け
 だものもかよぬ魔界にてうありける。しかりといへとも空海の淨寺にのほりたまへば所
 のたみ百しやうよろこび。おにとぞ悪魔をの祓ひてたびてんや此寺の大魔縁此ほとりの國
 へに出て悪事災難をなすこと。いかんともしかたし。空海よあけきやけれ。すあはち空
 海彼寺よ入給ひて。まづもろくの悪魔をうしろの山にかりこめ封し給へばぐひん共此法
 力に降せられてこの木のぬた。かしの岩はさまにひれふしてはねなき鳥のことくなれ
 ば界内あへて侵凌のおうれきく民百姓よろこびいさみかんしあへり
 さらば此寺を再興したまへんとて先本尊千手觀音ありしかは。空海淨きせいをふかくし加

持したまへり靈驗あらたなると生るかとし。しかれり寺中たちまちのんじやうし邊氏なが
 く巨益をえ。いよく悪魔の跡をけつり。國中のまもりとぞありけるか。今に於て女人い
 たる時のかならを悪魔わざをさすとかや。さて同じ國會津と云所。地境すくれたる靈地
 あり。此地の陸奥出羽越後三國の境をまじへ四隣あひのぞめり。精舎をたつる所をえ。土
 民を化するたよりありとぞほしめし。日ならずして大がらんをこんりうましまして。惠日
 寺と號し。金堂の佛像の皆金色にして。まづ丈六の藥師如來日光月光十二神將四面の廻
 廊ごとくくぐそくす又八角の堂舎を立。木像金剛界の曼荼羅九會の諸尊を安置し。住僧
 三百余人さかりに密教を行ひしめ給ふに。其印法和宗の祖師德一菩薩と云憎本來彼國に淨
 座けるか。來りて空海の淨門徒もつらなり。淨密法をさつかり。諸弟子の第一にそあへり
 給ふ。空海此寺を德一菩薩に附屬し給ひて委しく淨遺誠ともありて都に上り給ひけり
 さてねぐるすと云所に。塵をいてたる境地ありければ。みづから十一面觀音の像をつくり
 給て安置し。爰にも精舎をかまへて。一箇刹とあし給ふ此所の地かはきて。聊水なくて。
 所の民百姓等も愁けれ。空海此寺を建立し給ふ時。三鉢を以て燧石を加持し給ひけるに

忽に靈水赤がれ涌てさらにかはく事なし。人々よろこび。其ながれを汲て田畠をつくりけるに。うるをひつねの水にまさりしかば所もはんじやうし。寺院佛閣さかへける其寺を。三鈷寺と名づけ給ひけり

空海上洛ましくけると聞ゆしかば。高岳親王淨受法の爲に空海の坊にまふて給ひけるに。折ふし淨堂に淨行法ましくければ。親王しばらく淨堂の邊にたすみたはしけるがひりかに空海の檀場をのり見給へは。薩埵の儀形儼然として。光明赫奕たり。親王大さよたどろき。禮拜恭敬して。いと有かたおほしめし。扱淨行法おはりしかば。淨受法ましくて。あかく弟子となり給ふ。空海遠磨をしれるとよみ給ひし歌も。此親王につかはされし歌なりとそ中ける

すべて空海淨在世の間。一念の觀解を。こらし。一座の三昧を修し給ひけるとき。其相あらはれける。あるひは水輪觀に入給へば其室内ことごとく。みどりのさへとへんじて。みづなんたり。又覽字觀をこらしたまふとき。堂上ことごとく火炎もぬかがりて。ほのをれつたり。六大無碍の自性。萬法輪圓の具徳。本有の理。宛然としてみつべし。奇

瑞木げてしるしかたし

淨弟子あまたましくける中に。二人すぐれ玉ひしあり。操行智徳世のしらざる所。人のはからざる事。一人は智慧難思にして。萬人にすぐれたり。空海のたまひけるは。我秘藏の彼三衣箱の底あり。深旨尋ぬべし一人は。土州金剛頂寺の樹下石上に座して。生涯を送り給ふ。波あらし風たけ共。定心石床はたらくとなく。鳥巢をくひ獸をれて。禪溪洞倉あかくしづかこしるべし定惠の二徳。此兩聖子に現せしとを。扱空海淨生所あらば。詳岐國に淨下向ましくける。屏風の浦と申すは。四方山のかたち。屏風をたてたるがとくに。けはしき山あるゆへにより。名づけしとかや。空海淨生國のとあれはしかるべき伽藍を建立し。國民をも。化すべくとたほしめし。しばらく彼山にたこあひたまひて。境致を淨覽んじける處に。ある夜。孤峰のうへは片雲たほふとたはしめしければ。いきやうよもに薫じて。紫雲のうちに。釋迦如來淨かたちをあらはし。淨影向ましくけり。しんかん肝にめいじ有かたく思召。すきはち其影の御すがたを繪にうつし。とめ給ひて。萬人におがまざしめ給ふ。今の世までもつたはりてありとん

それよりかの山を。我拜師山と名付。又ハ涌出る嶽とも號し給ひし之。又そのほとりに之もたどらぬ大山なるに。此山にこそらせ給て。修法ましくけるよ。たちまち雲より五柄の利劍わまくなり。金剛藏王あらわれ出させ給ひて。空海と暫らくかたらひあはしませ給て此所にころ。伽藍をつくらるべし。佛法はんじやうの靈地なりと。おひとともに詣し。藏王も此所に跡をたれんとの待ちかひにて。けすがとくようせ給へば空海はよろこひあめならず。彼あまくなりし五つの劍を。巖穴にうつみ。すなはち中央の嶺をてんし藏王の權扉を開き。自手觀音の靈像を作り。本尊に安置し。終に精舎を建立し。蓮宇基をつらね。松坊前を並たり抑此境致とすは三桑の嶺ろべたち半天の雲巖をめぐり。四望山はれて。八ヶ國の境まなこの前にあさやか。さるによりて此寺を八國寺と號し。山號をハ劍山となづけられけるは。空より劍くなりければ。くはしき事の彼寺の縁起にあらわれけると

おあしき國の内に。又境致よき地ありければこれにも大がらんを。修こんりうましくける。善通寺受茶羅院と名付給ふ。此寺ももおほくの僧徒を佳侶せしめ。密教のさかんに

ハせ給ふ。此寺の額ハ空海淨白筆にありべされしとかや。爰にふしぎなるとありしと。或陰陽の師。阿邊の清明。事の縁ありて。讚州ふ下向し。夜道あれほど使鬼神をあひぐじてかれに炬をもたせて馬のよきへすすませけるに。今の善通寺の前近くあると思しきころ彼鬼行かたしらむなりける。清明ふしぎにおもひ勘發しければ。此寺の額は空海淨白筆なるゆへにや。四天王守護し給ふがゆへに。彼鬼たれををして道をかへて通りしと思惟し。善通寺をけるかにゆきすすまされり。おんのとく路より使鬼神いさもつぎあへす。をひつき來りしかば。清明いつくへゆきつるぞとへり。しかくどこたへける。まことにふしぎなりし事共なり又ある時土佐の國をどそり給ふ。山中に大きな谷あり。千尋の底より。岩かどつるさをけつるがごとく。みるよ心もきゆるばかりあるに。一つのかげはしあり。年久しき橋なれば。苦むしかづらしけまどひて。おしのおみともみわわがす。ことごとく朽ろんじけれ共。たやすくかけかゆへくもあらねば。往來の旅人。いとあやうくもわたりうる事ありがくて。いたづらに日數をつむやし。隣國にまかりける。されば橋はあれどもあきかごと

く。空海これを浮屠ぶつんしてかくては往來わうらいのなやみなりと。彼梯かきにむかひて浮持ぶぢ念ねんまし
く。さんぢいつまでも柄損へんそんする事なかれと。のたまひてわたらせ給ふに。さらにおやう
からず。にわかにかのくち木のがけはし。石はしのごくにありしかり。往還わうわんの邊へん。おんせ
んに渡る事を得たり。おたかも。いはしのごとくあれや。ひたひよ霜しもをいたく。山か
つも爪木つまぎこるまたよりを得心ごしんに利りをいなく商人しやうじんもはこぶにつおへすくなくして。久米くみの橋はし
の中たゆるもうらみも更さらにおかりけり
其後そのちあかく朽くす。まごにありおたき修加持しゆかぢあり。心なきくち木だに。かゝるためしあり。
いはんや有情うじやうをや。かの藥巴りやくぱがさかつきの酒さけを。はいて。遠火災とんくわいをすくひ。趙炳ちやうへいがかれた
る木を咒しゆして。ふたゝび枝葉しやうをしけらしける。神仙しんせんの術じゆつもかゝるためしには。およびがたか
るへし
弘仁七年こうにんしち孟夏まうかの頃。空海くうかい城外ぐわいに出でて。畿内きないを修行しゆぎやうましめて。禪定ぜんぢやう相應さうおうの靈峯りやう伽藍がらん建立けんりつし
たまふべき地ちをもとめ給ひけるに。大和國たいわうち郡ぐんと云所いふところにて。一人ひとりの獵人りやくじんに行逢ゆきあ給ふ。
其形かたちよのつねの人にほあらず。たけ八戸やくちゆたかにして。ほねたかくすぢふとくして其色いろあ

かし。青あお色の衣いをきて。弓箭ゆみやを帯たいし白黒しろくろき犬いぬ二疋にふたひしたがへり。空海くうかいふちなる人ひとと思おも
し召汝めしやんぢはいかある人ひとにてましますぞ。うのやうをみるに。久しく野山のやまにゐれしかたちあり
我がらん建立けんりつのこゝろさし有あて。こゝかしことたづねありく。然しかるへき地ちやあると問とせ
給へは。彼人かひと答こたへへちける。我われは南山なんざんの犬飼いぬかいなるが。野山のやまを領りやうする事こと。其數かずをしらす。其中そのち
に幽然ゆうぜんたる所有しやうりやう。三面さんめんよ山やまつらあり山やまは巽たつやにひらけり。万水ばんすいひかしにながれて。みなも
と一水いつすいにあつまれり。盡ひつはつねにあやしき雲うみうびぬ。夜よは又また靈奇れいきなるひかりかゝやく。こ
れ紀伊國きいこく伊都郡いどのぐんの南みなにあたり。和尚しやうしやうきたりてすみ給へ。かゝらず助成じよじやういたし侍さむらいらんと
ひて。かつ犬いぬをはあちて。其身そのみもともじうせ給ふ
うのち。かのかり人のをしへのごとく。紀伊國きいこくにおもむき給ひ。紀きの川がはのほとりに着つ給
ふ。いまの政所まんどころの慈尊院そんおんこれあり。さて山野やまやをみめぐり給ふ處ところに。かのやまどの國くににて。
かりうとの引つれし。黒白くろはくのいぬらつくとおもなくいで來きりて。空海くうかいをみてあつきたてまつ
りける。いよくたのもしくおほしめしかの犬いぬをあいぐして。やまゝにのぼりたまへば。
ほぞあく平原へいげんのひろき澤さわのほとりにいたり給ふ。うの土地ちのかゝりを御覽ごらんするに。東西とうざいは龍りゆう

の臥るかたちなる。山つらありて。東流の水あり。南北の虎のうづくまるかたちなり。嶺
 うびねて棲息興を。もよほす。浮木にのらざれ共たちまち雲漢よいたり。妙薬をあめざれ
 ともすなはち仙窟にいたる。輪轂を引て。帯をさす。日月地より出て。雲煙まなこの前よ
 つきは。まこと修禪相應の靈地。佛法弘通の聖跡。これにそくる、所はあらじとおほしめ
 して。いろぎみかどに奏したまはんど。山下にくだりたまへり。かの犬。又いつくともあ
 くらせさりぬ。さて都にのほり給ひて弘仁七年六月に表を奉まつりて。此所をさして。入
 定の地と申請させたまひけり。勅許とてほりなくして。いそぎかの地にくたりたまひて。
 つねに一兩ヶの草庵をむすばせたまふ。よりく此山にかよひあるよ。山路のほとりに。
 一町ばかりの澤わり山王丹生大明神のやしろあり。今のあまのといふころこれなり。空海
 此どころに一宿したまふに大明神伊たくせんしてのたまひけるは。妾は神道の威福をのそ
 む事ひさし。いま菩薩此どころにいりたまふ。妾がさいひひあり。弟子むかし人たりし
 とき。食國皇命家地方許町をたまへり。南の南海をかぎり。北はやまと川をかぎり。ひが
 しはやまとのくにをさかひ。西は應神山の谷をさかへり。ねがはくこれをたてまつり。

あがき世にしんかうのころをあらはさんどのたまひき
 かのやまどにて逢逢有し獵人は高野大明神。高野天野とて。山上山下ふ是をいはひたて
 まつりて財施法施たゆる事あり。威福をまし給はん事推して斗るへからず。此二神はすな
 はち母子ふてましまをもまつたへ。あるひ夫婦なりともまつたへ侍る。高野の大明神
 は。太神宮の御弟。玉津島の衣通姫をおもひ人にて。伊馬にてしのびてかよひ給ひける
 を。丹生明神やすからゆたほしめしけりされは彼玉津島へ神馬を奉られしとき。明神の
 御前よてくつばみのをとを。ならさるとつたへ侍る。垂迹の前は凡夫も來同し給ふ。伊
 ほらべんたるをや。さておなじき年の十月のころ。みかを御膳の事ありて。心神やすから
 すましくけるに。醫院の療養でだてをうしなひ。すてに伊のちあやうく。みぬさせ玉ま
 ふ。諸卿せんきあつて此事空海和尚に申て加持させやさんとていそぎ和尚をめしのほせた
 てまつり。諸卿しかくとやければ。和尚御心やすくらげさせ給ひて。そあはち御殿に壇
 をかざり。七ヶ日の間。護摩を修し給ふ結願の日表を奉まつり。香水をさげ玉ひしかば。
 霧氣忽に晴て。天顔快あらせ給ひ。伊瀬嶺に平愈ましくけり諸卿をはじめ。一天下の

人々。ふしぎの思ひをなしいよ〜たつとひうやまひける。去程に空海島野山に伽藍を修建立有へきとの修誓願はあはだ切なりされハ彼山は大明神直に大師ハ奉らせ給ひて既に三寶の敷地となりぬれハすみやかに堂塔のかまへをし給はん。誰か否といはん者のあらん。なれと普天の下王土ならずといふ事あしいか。か公家に奏せずは有べからずとて。官奏をへ給ひけり。うのおもむきなり。禪經の説ヲ准するに。くだんの地もつとも修禪によろし。今おもはく。上國家の修爲。下もろ〜のしゆきやうじやのため。おれたる本草をかりたいらげて修禪一院を建立すへきよし。此事秘感にかゝひけれり。刺許といこほりあくして。明神相傳の上ふかさねて修手印の印符をくださる。うの儀式あころかありし空海よろこび給ひて。印符をいたし奉り。かの山にたもむきて。地をひらき諸木をさらせ給ふに。こゝにふしぎある事侍りし。こたかき松のうハ枝よりよま〜ひかりか〜やまげり。これをあやしみ修覽しけれり。過にし元和元年に大唐明州の津にて投させ給ひしところの三鉢この地にとまり。こまつ枝にかゝりて。ひかりをはきつ。空海修らんじてかくころ。あらんづらめ。いよ〜此所密教有縁の地なることあきらかよあらわれし。わがせ

い〜わん柄すしてかさねて此三鉢をみるころの。よつこはじよよ。ふかくかんじ給ひける。はしめ明神のしめし給ひし奇雲靈光のしるしも此事をつけさせ給ひしとおほし召わはされ。夜を日につぎて。伽藍造立のいどをみまご。し玉ひける。此所より大塔を立んと思召すきはち地をつかせ給ひける時。ながさ五尺ひろさ一廿八分の寶劍をほり出しけり。是前佛のありけし。からんの舊基といふ事あきらかことよろこび給ひけり。此とみかときこしめしをよべれ。希有なる事とおほしめし。勅ありて。彼劍を宮中にめされ。ぬいらんまじ〜御感な〜めあらすして。すきはちめしと〜めをかれし。うの〜ちいさ〜かた〜りをあす事侍りしを。うらかたに勅問ありけれハ。かの御劍のわざにやと。そうしけれハ。あか〜ねの筒に入れて。もとのとく返しをかれける。さて彼三鉢のかゝりて侍りける松のもどをしめて御庵室をつくられけり今の御影堂すなはち。これなり弘仁九年の春のころ疫癘たこりて一人より一家にいたり一家より一國にいたり後ハ天下のわつらひとをりたまにも死をまぬかる〜はまれ成けり然か柁ハ大かたならぬ骸骨をれ〜うつみかくすにもいとまあらざして野みみち山にうつたがうじて。あ〜てあ〜をいれん地もさく。ちまたにさげぶ男



扱又。高野山にかへり給ひてかの南天の鐵塔をうつして。一基の塔婆をたてんとおほしめし。知識を十方にとちへて興善を四衆はのぞませ給ひ。つねに土木をいとあみ棟宇の花拂をいたし。紫金がきて尊像の莊嚴をかひつくるひ多寶の塔一基をたてたまふ。高さ十六丈なり。一層のいらかはかすみのうちにさしはさみ。九輪のかざりの雲のほかにあさやかなり。其中一丈四尺の四佛八尺五寸の四菩薩を安置したてまつり。佛客僧盛いらかをならべ。とほろをつらねたり。されり弘仁七年より。はしめて地をひらかせ給て同じき拾年五月三日にはのこりなく首尾じやうじゆしける。寺號を金剛峰寺と名つけたまふ。こんりうをとげたまふ車權化のじわざとは。いひまがらふしぎなりし事共也
さて御心のまゝに。こんりうし給ひけれ共つねに住し給ふ事ハあたはす是みかどの御願しげかりしゆへなりされり。公家のしんかうもふかく。空海の徳行もはあはたしかりければ。弘仁十一年よ。みとのりあつて。空海に傳燈大法師の位をさつげたまひたあしき十三年のころ。みかどいよく密さふかくおほしめし淨受法の宣旨山けれり。空海參内あつて。皇帝の御ために金剛道場をかまへてしやうこんあらたに。かひつくるひ。佛性三昧耶戒をさつ

女のごゑかあしうして耳にみてり。みかきこの事をかあしひねほしめして。こんしこんていの心經をみづから書寫したてまつらせたまひて空海を請じてくやうさんたんありけるにいま此しんぎやうに五分の宗をわかつて一代の教をおさむるむねなどいみしくかうさんせられし事。かゝる深義ともはいよしへの祖師たちもいまたのべ給ひさる事とみな人やかんしける

さて大師彦かうしやく一座のあひたに威験萬邦におよび。いまだ結願のとはをも。のべたまのざるに。よみかへる人。ちまたにみてり闇夜たちまちへんじて。日光かくくたるがとし。かゝるわらたある御法力三國にも其れおすくなく。いにしへにもつたへきかざりし靈應たごろかありし巨益あり。さればひかし彌陀三尊の吠舍離城に現に給ひて神光をはあつて惡鬼をやぶりたまひしといま又空海の馬臺東城に託せし法雨をそゝる苦のあんをそくひ給ふいまとむかしと時ことなりといへども。勝益これなむからざるや。これすなはち靈山ちやうじゆのちかしの開をのべて帝者しんがうのいまのころさしを啓したまふゆへありみづから權化と稱したまふ事まことにゆへ有とてころしられけれ





扱又。高野山にかへり給ひてかの南天の鐵塔をうつして。一基の塔塔をたてんとおほしめし。知識を十方にとあへて興業を四衆はのぞませ給ひ。つねに土木をいとあみ棟宇の花掃をいたし。紫金がきて尊像の莊嚴をかひつくろひ多寶の塔一基をたてたまふ。高さ十六丈なり。一層のいらかはかすみのうちにさしはさみ。九輪のかざりの雲のほかにあさやかなり。其中一丈四尺の四佛八尺五寸の四菩薩を安置したてまつり。佛客僧慮いらかをならべ。とほろをつらねたり。されば弘仁七年より。はじめて地をひらかせ給て同じき拾年五月三日にはのこりなく首尾じやうじゆしける。寺號を金剛峰寺と名つけたまふ。こんりうをどけたまふ車權化のしわざとは。いひあがらふしぎなりし事共也

さて御心のまゝに。こんりうし給ひけれ共つねに住し給ふ事ハあたはず是みかどの御願しげかりしゆへなりされり。公家のしんかうもふかく。空海の徳行もはきはたしかりければ。弘仁十一年よ。みとのりあつて。空海に傳灯大法師の位をさつげたまひたをしき十三年のころ。みかといよく密をふかくおほしめし淨受法の宣言山けれり。空海參内あつて。皇帝の御ために金剛道場をかまへてしやうこんねらたに。かひつくろひ。佛性三昧耶戒をさつ

けたてまつりたまひ。あらびに四衆にもあまじくさつけたまへり。されば大和尙奉_レ爲_二平城大上天皇一灌頂文云

忘_二神命於長途一捐_三泡身於驚波一爲_レ奉_レ酬_三國恩一遙歸_二于本朝_一云

此外嵯峨大后淳和の后妃も灌頂したまふとかや

あなしき十四年正月十九日に。大納言正三位兼行右近衛大將民部卿朝臣良房を勅使として。東寺を空海にたまはりける。そもく此寺は桓武天皇此地に都をうつし給ふはじめ。王城鎮護の爲_一建立し給ふところ。されはいま大師にたまはりしも。王城のまもりあらんとをまほしめしてなり。空海すまはち。大經藏をたて。八祖より傳へきたりたまふ處の諸の道具兩部の曼荼海會經論法文といく。うのうちにあんぢし。又にしみなみのすみよ。灌頂院をたて。淨法をつたえたまふのぐんぢやうにらあへ。又天長元年六月に。かさねて師資承の官符をたまふ。是すあはち長者補任のはじめなり。あまじき二年講堂をたたまふ。佛像の刊鏤道場の嚴飾班爾が精妙をさめ秘密の冲微をつくす。ことなるかたち。あやしき造り。まことに筆にもおよびがたし。大唐の青龍寺にいにしへ大空道場と名つけ

しを不空三藏ちよくをうけ給ひて。密教の地とたまひしより。あらためて。青龍寺と名つけ給ひし。いま又其例に准じて。東寺を教王護國寺と號したまふ事は。空海淨法文にこのてらは密教相應の勝地國家擁護の靈場之歸してうやまは。王化聖明にして。花夷泰平ならん。あこたりてうやまはずは。朝廷にわざはひありて。國のみだれやむことあらむれば天下たどろふべくい。東寺まますたるべしと書をき給ひしとかや
空海はじめ。つくしの觀音寺にねはしまし。時。或山のふもとにて稻を荷たるあきあに行あひ給ふ。其相たゞ人にはあらずと。淨覺じて。きみいにかある人そととひ給へは。たきあのはく。我はこれみやこ八條二階の坊といふ所にすまねし侍るゆへ二階の柴守長者と中者也と中されけれい。空海のたまひけるい。われもみやこがたのものよ。佛法をひろめ侍るあり。わが法をまもり給へと。のたまへ。おきなよろこびまもりまいらせんとてけすがとくにうせよける。其後又紀伊の國たなべといふ所にて。又いねをにあひたる老人にあひたまふ。たきあしけるい。和尙へむかし靈山にてみたてまつりしか。今は此土に出て佛法をひろめ給ふかと申ければ。わきみいにかある人やらんとたづねられし我れば魏の

國の大臣あるが。無福のしゆ生をすくひ。佛法をおひするゆへ。八條二階觀音堂福子稻富が家に寄宿し侍ると申されける。空海われも修行たけりて後。都にのほりあべ。皇帝の御願所東寺を給らん。しからは八條二階といほちかし。われ佛法を彼地にひろむべし。かならず來りまもり給へと。ねんごろに約諾して。又行かたしらすうせにけり。弘仁十四年に。東寺を勅給したまひしかば。やくろくをたがへす。かの人東寺よきたり。此日ころ所々にて涉やくそく申ける二階のしほり長者まいたりと申されければ。空海あゝめからす涉よろこひおつて。さまぐよもてあし。涉櫻應あつて。赤飯をすゝめまいらせ。法樂のためとて。法花經を講讀してさかしめ給ふ

さてみやこのたつみなる。きやうちのすくれたるやまあり。おれよすみたまひて。我佛法をしゆてしたまへとて。すこしきやしろをいとあみ。空海みつから額をかきたまへてまいらせられける。その山はすきはち今のいあり山これあり。八條二階ハ今の涉旅所之涉まつりのとき。涉こしにかゝる額ハ。空海のかきたてまつりたまひし額なり。されは空海かのためさふこゝかしこにて。涉あひまされし日をかながへみるに。みあ己の日ありければ

れより會日を己の日にとるなり。またいつあひみたまへとも。かのねきを稻をになりさるとなし。されいねをにあふとかきて。いなりとよめり。これより稻荷大明神と號しやさせたまひけるとあり委しく縁起にみわたる

こゝに南都の守敏僧都徳行世にきこ神變奇特なる事共多かりしかは。明知識ありとて。空海在唐のうちよりも。みかども涉歸依ましくけり。されば王城のまもりとて。桓武天皇の涉宇に御建立ありし。朱雀門の東西に。東寺西寺とて。大なる境地をかまへて。伽藍を二ヶ所たてたき給ふ。此住持たらん人と今代にてはたれあらんと。公卿せんぎ區々ありしが。みとのりあつて。西寺をハ南都の守敏僧都につかはされ。東寺をば空海和尚涉歸朝の後。弘仁十四年につかはされけり。扱かの守敏うづと申すは。法力も大備におどらぬ人なりしが。名聞のこゝろさしふかく。時のおせいをこのみ。つねく空海の法力もををねみねたみ給ひしもうこしにて御受法のときも。はるかに此事をしりて。護法をつかはして立聞をさせ聞せけれ共本より空海通力つよがりければ。是を知しめして結界ましましして。護法むなしくかへりしとかや。されば御歸朝ありて。さまぐのふしをばほか

りしとをきよとぞまたけたてまつらんと。たくみをもりければとなり。さて大師の東寺をたまりしかば。王城のまもりをいひ。かつは天下國家のまもりなればとて。胎藏界の七百余尊をあんちし。金輪の寶祚をまもり給ひしかば。又西寺にも南都の守敏金剛界の五百餘尊をあらはして。王脉の長久をいのられけるか。空海は國々にめぐり。あるひは伽藍建立又は四衆を濟度し給ふに多いとまかりしかば。そのあひた守敏僧都はあさなゆうあさんだいつかうまつり。龍顏にちかつきたてまつられける。ある時帝御手水をめされけるに水いたくこほりて。たへさせたまふべくもあらざりければ。しほとてさしをかせたまひけるを。しゆびん御手水にむかひ火の印をむすべければ。こほりたちまちにどけてわかかへる湯のとし。みかどをはじめたてまつり。諸卿みあふしぎの思ひをおしけり又帝寒天の折節火爐よ火をたほくをかさせ給ひて御障子をたてこめさせましくしかば其火氣におかされ給ひて龍顏に御あせしきりにまいりたまひしかば。和僧此火をけす事いかにとれほせられければ。守敏また火焰にむかつて水の印をむすびてたちまち爐火をけしたまひければ。寒氣御殿のうちにみちくして。はたゑをたかす事。五味に水をろくがこ

とし。これよりして後。しゆびんかやうの奇特をあらはせる事。神變をたたるがとくありとて。みかど御歸依渴仰したまふ事よのつねあらざりしかば。諸卿とにも變化ありとて。たうれをのゝきたつとひける。本よりしゆびん聖をあいしたまへは。さまの奇瑞どもをあらはし。名聞にほこりて。かりぬめにも空海のことをあしきさまに上聞に達しられけるを。空海さこしめし。いかにしゆびん法力を盡し給ふともわれにはおよび給ふまじけれども。あへてあらそふまさはさしとてやみ給ひしに。みかど此よしきこしめし。すなはち空海をめされ。守敏さうづの此間さまへ成しきとくどもを一々御物語り有て。かゝるよしきはよもあらしと。御願ありければ。空海もかんじてたつしけるさてみことのりありけるの空海もかゝる事やしたまひんに。いとやすかるよしやいかにとほせ有しかば。大師のたまひけるは。おらうふににたりとおほしめさんか。馬鳴。震。唯鬼神去。閉。口。梅。檀。禮。塔。支。嚴。提。顯。耳。と中事の候へり。空海があらんする所にてり。守敏よもさやうのきとくありあらしかたなくひありとてあざむかせたまへばみかど常々。守敏空海をねたすれし事を聞召けるによりて。さらうの兩人御験をほどこさせて威徳の勝劣を御覽せまほしくおほしめさ

れける。勅しやくよおふじて後前に候こゝろす。時にみかど湯藥ゆりやくをまじりけるが。建蓋けんざいをさしをかせ給ひて守敷に仰られけるは。あまりに此水つめたく花ほゆるあり。例れいのごとくに加持かぢしたまへどちよく有しかば。しさいゆのじとて。けんさんに向ひて。火の印をむすび加持しけるに。水あへて湯ふならず。みかどこはいぬにふしぎぞやと仰られ左右も目くばせし給へり内侍ないし典侍てんしなりけるもの。わざとおつくわさかへりたる湯をついでまじりける。みかどまた湯をたてさせてまひらんとしたまひけるが。又けんさんをさるをかせ給ひて。これのあまりにあつくぞ。手よもどられやと仰られけれ。しゆびんさまにもこりずして。又けんさんけんさんにひかつて。水の印をむすび給へとも。湯あへてさめす。なをわさかへりけり。しゆびん前後ぜんごのふかくに色をうしあひ。これたゞには侍らず。いかさまにわざをさすものやあらんとて忙然ばうぜんとしてあされおたまふところ。空海くわいうへなるしやうじをおけて。いかみしゆびん空海これに有との。しり給はずや。つねに我をおさむき給ふらんあれど。星光せいこうは朝日あさひよ消燈しょうとう火かの曉あけ月つきに隠かくること。これまことをあらへす本文也しるごはしむとせよ。しらざるをべしらすとせよ。これしれるなりと。いはすやどのたまひけれ。しゆびんとはなくておはし

けるが。大きにはぢたまひて。懺悔ざんげを心の中こころのちゆうにさしはさみ。願ねんを氣上きじやうにかくして。座をたちやふりていかりなまじて。退出だしゆつせられける。しゆびん思ひけるは。是はひとへに君一人にうらみあり。空海をうらむる所さしといきどをり骨髄こつずいにてつしていかにもして君にあたりたてまつらんと。はがみして思案しあんしたまひしが君を。ふとく人になしたてまつり。末代まつだいまでも惡王あくわうの名を定めさせやべしとて。先何ともなく。大旱魃おほいばつをやりて。四海よっかいのたみを一人もあか飢渴うげよおはせんと。はかりて。一大三千界の中ちゆうよあらゆるの龍神りゆうじんをとくくどらぬて。わづかある水瓶すいびやうのうちを籠こもてぞをかれけるこれによつて。孟春もうしゆんより三月さんがつのあひた雨降事あめふりなふして。農民耕業のうじんかうぎやうもつとめぞ。天下てんかのうれへ。一人のつみよそ歸しける。君をるかに天災てんさいの民に害がいある事をうれへほしめして。公卿こうせい天上人てんじやうじんにたほせて。いかせんどの後事ごじなり。さらばおめのいのりをなさしめ給へとて。東寺とうじと西寺さいじとにちよくしをたつ。しゆびん心に思はれけるは。わが法力ほくりきあらては雨一滴てつもふる事あらし。かく思ひしらせして。空海くわいちから。をよばるるぞ。かの水瓶すいびやうの龍神りゆうじんをばなちてわが一所いしよに雨をふらすべきものをねたもひすまして勅しやく答こたへやされけるみこのりをかへ

然る間。上一人より下四元に至るまで皆掌をわらせ。頭をたれて空海を禮し奉らすといふ事あり。御門御感のあまりに空海を少僧都に任じ給ひける。いよく御歸依あさからず真言の道をふかくしんがうましますことなり。ひとつは是よりうちりける。さて御成就のち聖衆をおくりたてまつり給ひける。まことの善女龍王をば。やかて神泉苑の池にとりめ奉りて。龍花の下生三惠の曉まで此國をまもり。我法をまもりせ玉へとかたく御けいやくありけるとかや

されば。今におゐて。かの池に跡をとめてすみ給ふ。かの壇上にすへ給ひし茅にてつくり給ひし龍王の忽に大龍と化して。天におがり無熱池へとびかへり給ふとも云。又ハ聖衆と共に空にのほりて。東をさして飛去尾張國熱田の宮にとりまり給ふを。これ珍事なりとて。いまにあがめをかれてかのやしるにありとかや。佛法東漸の先兆東海鎮護の奇瑞あるにや。大師のたまひけるハ此龍王は慈悲心ふかふしてさらに害心なく國をまもり法をまもる神也。末世にいたつても此いけふかくして。水おほくハ龍王すみ給ふと思ふへし。しかるハ國土豊なるへし若又池あさく水すくあくは。龍王他界にうつり給ふらんと心得我門徒

たらん後生の弟子。公家にうつたへやみ及はず。ねんころに所誓し留め奉まつるべししからず。國土あたやかならず。人さばぐべき事あらん。おろそかふすべからずとのたまひしか。いまかの池をみるに水あさく池あせたり。あそらくハ龍王他界にうつり給ふかどうたかひる。然れ共請雨經の法を修しおこさるゝとに揭焉の靈驗たぬざる時なり。いまた國をすてたまはさるゝあらずや

ろもハ神泉苑と申すは。大内を平安城にうつし。はしめて此京ありしとき。周の文王の靈園に准へ。方八町に築れたりし園圃也いにしへの乾臨閣と名付て。代々のみかどの御遊の園ありしとかや。されば岩泉わきながれて水三伏の夏をうしあひ。松柏のこするしげりてハ風一聲の秋をとめ。まことに哥堂舞閣の基柏梁臺のいにしへの跡をうつし朱櫻紫殿のかまへ驛官のふるきためしをならふ。歌吟の聲たゆる事なく。詩酒のあそび。興をもやし。龍神屈宅の地となりしかば。恐れおほく。濁穢のハかり有。されハあかく雜人ばらの往來をとめ。清淨の道場風雨時にかあひ。感應奇特の靈地とあり。あれよりこのかた代代の聖主もこれをあがめ。家々の賢臣これをつやまひも世に早懸れこる時なり。まつ此

池をさまめらる。もかるを。御鳥羽の法皇ありおさせ給ひて後建保の比より此所無下に願て。刺棘路をどぞぬるのみあらす。猪俣のすみかどありて徳綱の音。妙法の聽をおどろかし。飛騨のひなき雲乘の心をさばがす。心あらぬ人ありれなげかすといふ事あらんや。承久の亂の後。故武州禪門ひろかに此事をかきまひ。築地をたかふし。門をかたくして。雑穢の人をどめられけり。其後涼漢いやくありたまりて門も増ゆるややくまつたからずして。けがらはしく。おとて女のへだてもある。心のまゝに出入するは其に制する人もある。牛馬の水草をもどむる苑となり行けり。かゝるたところへたるけしき。さこそ龍王の心よるこばしからざるべし。空海の冥鑿もやそからさらん。君も臣も世をあらめ。民をやすからしめんはかりををめぐらさん人。はやくしゆりをくはへて。かの龍王をわかめ給ふべし。此所をわがめはすあはち國土をあさむる也。君臣のみはあらす。わが法をつがんともからは。すみやかにさせいのいたし。法樂をますべし。此龍王の淨心になはは。わが心にもかまふならん。空海みづからのたまひしとわや。心あらん人。誰か拍術をいたさんらんやかくて守教空海の法力にかたざる事たびくよをよぶといふ。此度はよも雨をふらさ

じと思はれしに。思の外に大雨國土をうるほしければ。いよくいかりをなして。空海が此世にあらんうちは。我法力は及びかたし。どかくかれを調伏し。心のまゝにほくらんと噴煙の炎胸をこがし。西寺に引籠三角の壇を撰本尊を北面に立て。軍荼利夜刃の法を行れけるころおそろしけれ。空海此事を聞召いかで祈りまぐべきと。すなはち東寺に壇壇をかまへ。大威徳明王の法を修し給ふ。雨人いつれもたぞらぬ徳行齋修の尊宿いかりをなしてながひにもみよもふでいのがあらたまへば。二尊の別合たまひける。かまら失空中に合て。地にたつる事おびたしくなりやむひまもあし。兩人いまゝかき。ゆたんありての大事なりけれ。たがひにましろかずいのりおひ給ふ事七日七夜あり。空海しゆびんに行をゆこたらせはかりこと。にはかに御入滅のましを披露せられければ。僧俗かましひの参みだにむせび。貴賤うれひのこそをのむ。しゆびんをれをまゝ給ひて大きによろこひ法威をやうじゆたんと。いさみつ。すなはちたんをよぶられける。さめとさしゆびんくれはさち垂て。心身擾亂せられけるが。朝聖の前にはふれふしてのにおにはかまら成給ひけりまこと。呪咀諸毒藥。還替於本人と説たはふ。金首ま

ことにはたちまちしるしある事。ふしきなりし効驗あり。されは空海は正法の御こころざし
 ふかき權者なれば。東寺はいよいよ繁昌して。いまにかはらす密教さかん也。同じ權者と
 いひながら。僧都は噴嚏ふかく。名利の心ざしはきはざしきゆへ。其のち明王の矢さ
 きにかり。西寺もことごとくほろびて。いまにあとかたもなし。今の西院村といへる在
 邑かの西寺のおとなり。此所の田の井守敏僧都の墓とてむぐらしければしるしのみあり
 これを思ふに空海は釋迦如來あるへし。善をもつてゆじやうをすくひ。いまにいたるま
 て所々に跡をかゝりやかし給ふしゆひんは提婆達多あらん歎。惡をもつておとかたもあくほ
 るび。人のみせしめとあさしむ。かれといひ。これといひ皆權化佛菩薩の方便いつれをか
 よしども。あしどもいひはてんや。凡夫のをよびしるへき事あらずとあん

天長年中の事あるに大師高雄寺にこもらせ給ひて年月をかきり修修行有しと侍りきその比
 大納言長房朝臣の家中に大に疫病おこりて上下數十人なやみふしける長房此事をかあしひ
 て空海をじやうじ祈をうけたてまつらんと隨身番の長をつかひとして擁護をかうふるべき
 よし。ねんごろよやおくりけるよ。空海のためとく。そへからくまいるへしといへども高

座の山門をもちて出さる所願侍れはさきと參向にあたはすこれ又あま事ありとてゆもちあ
 りし五鈷杵とねんじゆとを弟弟子眞濟太徳にもたせつかはされける。眞濟長房の室にいた
 り給ひて。しかくごのたまへは空海みつからきたり給はん事を。本意なくねもへる色也
 しかば眞濟かのおくらせたまふ。具をもつてすこしゆ加持し給へは上下の病人一度に聲を
 おかせて。平愈したりとてたまひがかりければ大納言もよむく空海を恨みたてまつりし事
 かなあらかたやゆるしたまはれとていよいよしんかうあつとぞあり給ひける。……
 さるほどに大師在唐のむかし背龍寺の計果和尚の語り給ふは密教の傳法寫經すでにをはん
 ゆはやく。本朝よかへりて此をしへを流布し衆生をあまねとみちひき給ふべしといひ佛法
 の轉範そのうつはものなりといへども病のつゝしみたるべき事也。その時われかあらず
 まもるべしとれんごろにのたまひしかあんのとく空海歸朝のち天長八年六月のころには
 かに灘濱出きてあやみ給ふ事はあはだせつ也。大僧都の辞表をたてまつらる兩楹壁にあり
 三泉たまたちいたり龍顏をしたふ呼咽聲をがへりみて爛肝とともかかれける。……
 醫術とくくつぎはてし命もたまちがたく見ぬさせたまひけり。しかる所にうつくとも

なき修行者一人來りて空海に講すべきよしやすかたへの弟弟子うたかひをなしてしかく
 どりあはす侍りけるに推て。空海の臥たまふ病の床にのぞみける空海かつはよろこび又は
 ねそれたまふけしきなきめならす見ふ給ふ此修行者眞言を誦し給ふ事數百遍癡癡をぬき出
 してたちまち平復したまふ衆人奇異の思ひをますどころよ。かの修行者座をさらすして忽
 然としてうせにけり
 空海を始奉りみましく中あはされける。これ青龍の惠果和尚ありいにしへのちきりぞ。
 わすれ給はずめらはれ出て。かく護持し給ふ事の有かたさよと。そのくこくうにむかつ
 て禮拜したまへり。この皇嘉門のほどりに大學の助紀の百枝といへる人ありつねに北倉
 を開て空海のおそへられたる皇嘉門額の文字を力士跋扈すと。おさけりをなとし。ある時
 百枝かりねの。ゆめのうつよとも。またわかざるに一人の力士きたりて。まくらかみにた
 ちて。こぶしをあげて。したかにうちたり百枝をさつき。そのさまを見るに正よかのが
 くの字にかへりけるるれより百枝つねにやまひをうけて身まかりけり
 されば小野の道風は朱雀門の額を朱雀門といひつしと難せられしかたたちまちばつをう

けたる。大納言行成卿は前車の跡をおもんじ聖跡をおもくし。給ひしゆへにや。天元五年美
 福皇弟の阿門修造のとき門基これあらたよして額の字すでにくらぶ。いよしへの文をう
 しおはす。うるめしき色をくはふとと繪圖をくだされし東寺灌頂院にて誦誦をじゆし
 ふかく大師の眞鑿をたうれ祭奠をまうけて空海の許香をのぞむと。見ふたり。かやうに篤
 信をいたしけるゆへにや子孫臨地の長とあて久度朝廷につかべし人皇五十四代仁明天皇の
 修字承和元年十一月に空海奏狀をさへげて毎年正月は後七日の修修法をつとむべきよし奏
 し給ひけれはすあひち例の修願とさためられけりこれは四海靜謐百歳成就の爲なり七日け
 つぐわんの時清涼殿にしこうし香水を加持して玉味に。ろよぎたてまつり。をよび諸臣も
 もこれをろうぎて。もろくの悪事災難をばらひたまふ。およろ眞言加持の義みあもと月
 氏の雲より出てあがれ日域のさかひにおよふ大唐にはすなひち長生殿をたて、内道場とし
 我朝にハ又勘解由司職を。あらためて眞言院をたてらる
 まことにおもんし。おかめ給ふこと。あらたにして。あいかん。ゆるまにあらそ四代の見か
 と兩帝の後妃みな。くはんちやうの壇にのそんで空海を師とおふき。たまはざるはあし。

すべて大師御歸朝よりこのかた御くわんを。つとめ給ふ事五十余ヶ度あり其外あるひは。けつねんの。くはんちやう又は加持香水あるひは仁壽殿の十八日の観音供又は真言院の毎日の御ねんしゆきと色々の淨願を定め。をかれしと今に至らまで。おこたるとあし。これみお國を守り家をどのへ。おのれをあため人をやすんする妙術たう。しんごんのをしに。歸するも也。されは一人より万人よいたるまで。たれか空海のおんごく。しんごんのみやうくわんを。かみむらさるべき心をもめて。思ふべきをや真如親王とやすも平城天皇の皇子高岳の親王とて東宮に立せ給ひしかは弘仁聖王の御次よ一天のあるじとあふがれましますべかりしか世の中。おもひの外なる事共出来て御くしたるさせ。たまひ大師の御弟子と。あり給ひけり真言の修學などいとかあてく。まことなせ給ひし人なり。ある時此親王するの世の御かたみなりと。おほしめし。ひそかに空海の御影をうつさせ。たまひけるに空海は。かくともしらせ。まらせ障子をたてし書たまふに大師はやこれをしらしめて。わがかたをまらつし留給ふか。ままこをば。みつからられやすべしと。のたまへば親王あまら給へり。さて御影の御まぶさは空海みつから。されさせ給ふ高野山の

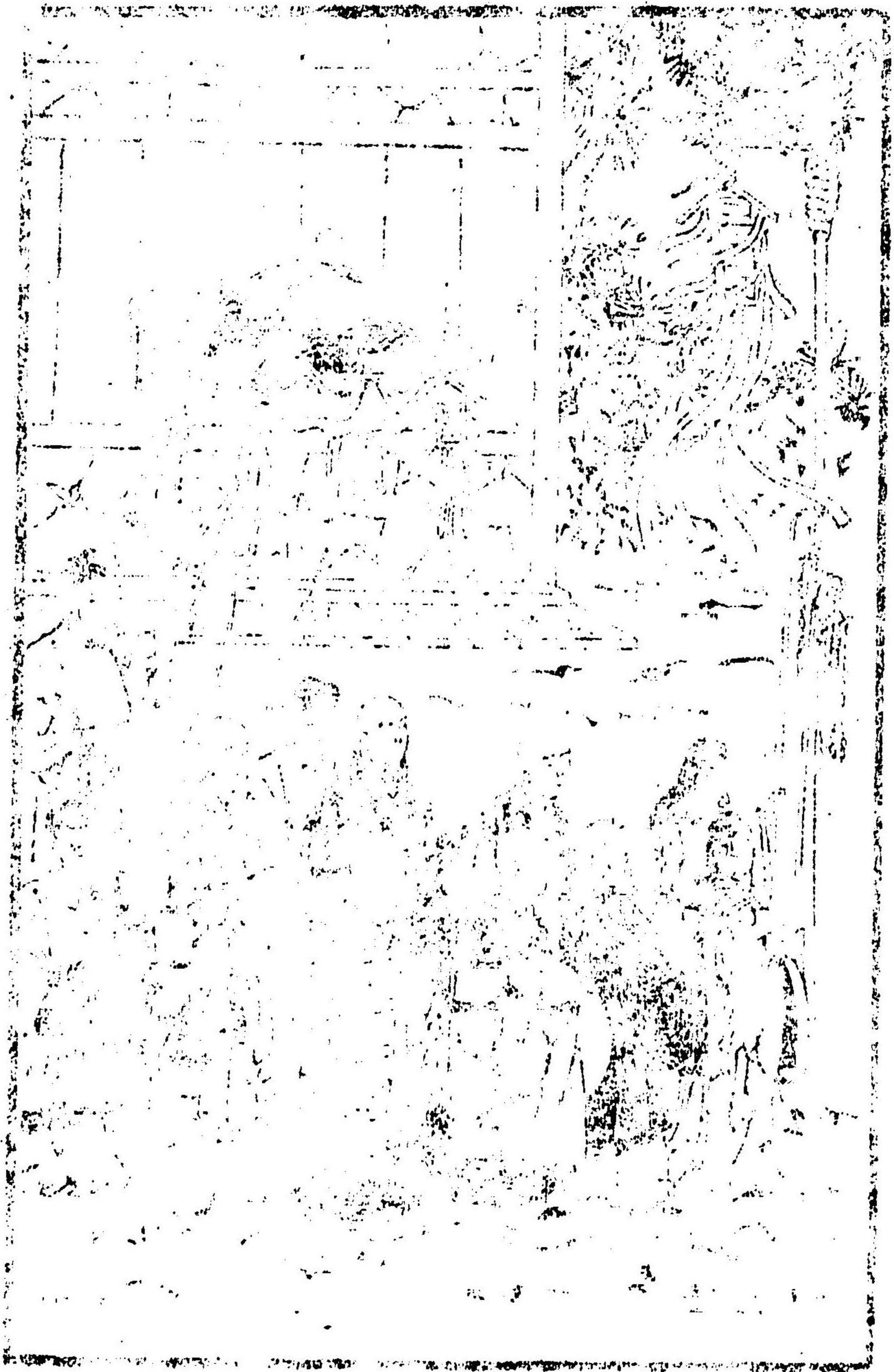
淨影堂に安置せられし此御影也との時親王又一ぶくうつしをま給ひて空海御入城のち御身ふしたかへて入唐し給へりとして中傳へ侍り
 これの去ぬる天長九年より空海教味をたつて坐禪をこのみ高野をはなれて高野ふうつり給ひて東寺をの實惠僧都にゆつり高野を真濟僧正に付屬し真言院を真雅僧正にゆつり給ひてつねに南山に。こもらせ給ひけり。しかれ共。あを朝廷へしきりにしやうし奉らせ給ひければ。をほかたとみやこにまししけるか。みやこのみことのりに南山より。かよはせ給ふ旅宿のうれひ。さこそとて大和國弘福寺といふ淨寺を高野より都へ。かよひ給ふ中宿にして空海に下されはる。こゝろありかたけれ。うもく此寺と申すは天武天皇の淨願とかやこれ又天下の御きたう所にして。つねの人住むべき所に。あらよりし空海よろこひ給ひて。折々此寺に住し給ひてけり。されはるの代までも弘福寺は東寺の末寺なりしこと高野山にかへり給ひて。もろくの淨弟子をめされ。のたまひけるは。われ此山に住居し十六丈の塔を建立し其外堂舎いらかき。あらぶといふとも遺跡いまた心のまならず。しかれども此土の御縁つきのやうやく入定すべし。しからば第一の弟子實惠禪師この功を

んやと。のたまへ禪師のいはく。ちから。そよぶ程つとめすらん空海のたまひく禪師
 の國王の師として。わたくしよ。いとまもらし真如禪師はらん。こたへていらくたふ命
 にしたかひ侍らん空海のたまひく禪師へ他卿の御心ありもつはら一住あかるへし真雅禪師
 はいかん。われも命にしたがひ侍らん師のいはく。あほ別心あり真濟禪師いかん。こたへ
 ていはく檀越のやくをうくる事あり。しかれいかでか命にうむかむや師のたまひく人
 のちぎりぞうけて。へんすべからず真紹禪師いかん。こたへていらく洛東ふ少しき堂を
 建立せんとするよ。いとまもらす。しかれ共いかで命にそむかんや師のたまひけるは。こ
 れ又とはり也我山に来る事は。あたはさるへし真然禪師一人師の跡をまもる。思ひあり此
 故ほ此山を禪師に付屬す但自力いまだ。あつからされは實惠大徳助成して功を。くはへら
 るべしとありさて又承和二年三月十五日に御入定も。ちかつかせ給ふとや。たばしめしけ
 む又かねて。御遺言してしめし。給ひけるは我入定せんとは今年今月廿一日寅の刻也もろ
 くの弟子等悲泣する事なかれ我をまはち入定の後は兩部三寶に歸信し奉るべし自然に我
 かはつて眷顧を。かうむらん我生年六十二夏藤四十一あり。我はしめに。思ひしは一百歳

よをよひて。世にあらがら入教法をまもり。たてまつらんと今は。もろくの弟子等をたの
 んて。あがく即世しさんと。おもふ也
 我死して。のち兜率他天に往生し彌勒慈尊の御前に侍るべし五十六億餘の後よは。かあら
 ず慈尊とともに下生して我先庸を。とふべし又しばらく。いまだくぐらざらん間には微雲
 管より見て信否を察すべし此時つとめあらんものにつ。さいはひを得さしめん不信あらん
 ものには。又不幸ならしめむ。ゆめく後にたろくかにする事なかれこのたまへり。こい
 にもろくの。弟弟子等さいこの遺告のほとけを。きくにかみしみ。きもに銘して覺す
 袖をしぼり。給ひける。さて入定の後。すでにちかつきしかは諸弟子空海を取まき奉り
 て口々に彌勒佛の寶號をそ。とあへたまひける。あんのとく。つねに承和二年三月廿一日
 寅の刻に結跏趺座して奄然として入定ましりける。つともし六十二夏藤四十一もろく
 の大徳みな。わかれをたしむ。たまふゆあけきは。ことばみやかのしや羅さうじゆの。ほ
 どり釋尊ゆねはんの春の天には溜盡の羅漢だに。あをわかれのねもひにこがれたまひき。
 いはんや時すでに末世なり。とに凡夫の身にして。あけきたまふは。とかり也



御行法の床は。むなしくのこりて山風にはらい御觀念の實あかくとちて月ひとり。すめり
 花は根にかへり鳥は谷に入りぬ孤山に春暮て神室になし結縁の。あかざるとを。思へ十
 六餘廻のゆふへ。すみやか也出定の期約を。ちぎらんとすれば五十六億のあかつき。はる
 か也。たのし三衣のたもとを。しほり一鉢のおぢはひを。あすれたり。さても奥院とい
 ふ所は。かねてより。入定の窟と定め給ひしかば。かしく送り奉り。たまふに實惠。
 眞雅。眞如。眞濟。眞紹。眞然等淨典をか。せ給ひて世の。ならはせに。あぞらへて七日く
 の淨齋思おこはれける。淨かほばせ。あつらへさせたまへす。淨齋髪をか。おらせた
 まひたり。あつらへし石をた。み。あつらへし拵を。たてられけり太上天皇も。ともによ
 なけき。あさからすましく。實惠等の淨弟子の中へ勅書を下またまひて。ねんごろに勅
 用ありしとなり。いとまかしこき。みとのりなりしとかや。さてもろくの大徳あるひは
 公家の護持をなし又別所の居住を。こころざして。あつらへし雲嶺を辭し給ひしに空海の
 遺命に。いたがひて眞然僧正のあつらへし高野山に淨とまり。ありしと也
 大師入定のとへんとに。いまた其例あしといへと西天竺鷄足山の例にあぞらへ給ふ故が



大寶釋經に菩薩の終定に十種の法を説に第十にはよく正法をたこし。三寶を紹隆して絶さ
いらんとしへり。されは高野の樹下に住し給ふて慈尊の出世に。いたるまで國家の福利を
まし佛法の恩命をつぐ。はかりとをまし給ふ。いつれの祖師といへとも。いかてか弘法大
師に及び給ふべきや。ありかたき事共也

承和元年の比明年三月にハ入定有べきよしみかどへ奏し給ひければ。みかど多なき。あ
さからず我早世の後葬喪を和尙頼むと常におもひ定め侍るに。我に先立て入定あら
は我約束たかひ侍りあんと。のたまへハ大師がさねて。ゆされ給ふは後崩の時はわれ入
定いたすとも。よきにいたしたてまつり。侈心さしを。かなへ侍らん侈取れを侈いうき。
有へからずとゆさせ給ひしかば。みかど多感あめならず。和尙は生死ともに自在の身さ
れば。いかでかことば。たがひやすべきと。とよよろこひ。たまひしが其後承和九年七月
十五日は崩多ししける。此みかどと中奉は入皇五十二代嵯峨天皇と中奉は皇帝也さて
侈かうを多遺詔の。むねにまかせて多棺を嵯峨野の木の上に。かけをさ奉るに。しはら
くあつて。雲に入けりさて南山の方よりむらさきの雲。さか野まで引つたひ鶴與丁なる雲

のうちにて。手にく浮棺をかきて高野山のかへ。とひ行ける見る人さまをけし。聞人かんにたれず。いふ事なし。

かくて浮棺を片時の間に高野の大塔のうしろに。かきすへ。かよちやうと。たほしきもの行方しらすなりにけり。あかれは入定の空海現然として出定あつて實惠眞然あんと。もに茶毘したてまつり浮骨をの奥の院大坂のにの峯に。たさめ奉られけりこの事高野の肥にくはしく。のせ給ふ随分の秘事と申傳へけると也。其後天安元年十月廿七日大僧正をあぐられける宣命あり眞濟僧正の葬聞によつてなり法命大和尚位を。あぐらるゝ事は眞元六年三月廿七日あり。その勅書はいはく

傳燈大法師位空海

右可賜法印大和尚位

勅すらく智惠の峯たかく。ぼだひの月ほからかあり。三密の法印四輩の儀形たり人亡して道さかんなり。世ふりて名あらたあり。これ景慕のはあはた。ふかさあり追慕して何ぞ止なん歸贈三寶尊一式賞三幽魄可依前件一主者施行せよと也

ある人慈覺大師の浮前にて佛法の事あんど。かたり待りける。つおでに高野大師の眞言はそこし荒涼なるべし。あどやければ。うの夜慈覺大師の浮ゆめに。見たまひけるは高野大師の浮弟子康修といふ人來て告ていはく和尚に。たいめんし。給はん爲ま我師來り。玉へりと云慈覺急き出玉ふに庭の面に一本の蓮花あり其上に五金結剛杵有り其外は更に人みえす。慈覺あやしみて是を問玉ふに康修答ていはく此金剛杵は。すまひち我大師ありと。いへり慈覺ゆめさめて。此事をたつとみ離ひけり

されば代々のみかど。いつれもしんこう。ありし中にも人皇六十代延喜の浮門の浮時拾皮色の。浮ころをも一襲空海五代の浮弟子觀賢僧正をして高野の浮廟に。をくらせ玉ひける僧正これを持參して奥院の廟窟をひらき拜せられけるよ。霧のやへへとてたるが。ことくよして。浮婆おがまれさせ給まはすされは僧正かしまみの。なみたをながし謝していはくわれ生を五欲のさかひに。うくといへともさらは犯過をし。いかてか法法味を。見たてまづらざらんと。ねんころは。さんけし玉ひしかは忽ち秋の月の霧を。いつるがごとく浮すがた儼然として。あらはれ玉へり慈覺あがく生て浮婆を。おほへり。浮ころもやぶれ。

子んごぬ希有の。たもひをあらして泣拜せられけり。扱彦くしを。有りたてまつりて。後こ
 ろもを。いかいせんと。おもはれけるに微風をのつから。またつて本の彦ころもを。ふさ
 ちらし。ければみかどよりしんぜられし彦ころもをさせ。たてまつり給ひけり
 其時僧正の彦弟子石山内供淳裕といふ人僧正にしたかひ。まいらせて。同じく彦廟にたは
 しけれど更に彦すがたを。たがみえ給ひすして。かみしみ給ひしかへ僧正彦弟子の手を取
 わづかよ彦ひざ。ばかりに手をふれ奉られけるふ。其手一生のおひだ異香薫して其匂ひ更
 にうざる事。あかりしとかや扱僧正みやこに。のほり彦ころもをたてまつりし彦廟内の。て
 いをくばしく奏したまひしかみかどをはじめ。たてまつり公卿大臣あのみりかたくな
 おもはれける
 僧正するへち表を。たてまつりて詮議のと奏し。申されければ延喜廿一年十月廿七日に弘
 法大師と云彦名をまくらせ。給ひけり。その時我昔遇薩摩等の頌四句の勅答など。有ける
 とかや。さて人王六十二代村上天皇の彦字應和元年九月に天台座主僧正延昌東寺長者僧正
 寛空なし時よ参内して天顔に。ちかつき願密の奥旨をのべられける。ついでに勅問にの

たまはく弘法大師にあまたの。名ありといへり。いかに寛空奏し給ひぬ。しやらく十號た
 はします也一には眞魚。二には貴物。三には神童。四には無空。五よに激海。六には如空
 七には空海。八には五筆。九には遍照金剛。十には弘法大師。とそこたへられける。又
 延昌奏せられける。此大師の十號を如來の十號に准するに。その義相當れり。すあはち
 一の義門分別配當せられけるに。辨説教聞をねとろかし。解尺露襟を。よろこみしむ寛
 空又密教の。ころもをもつて。十號の深秘をあらひし給ふ聖主勅して。のたまはく東寺天
 台の棟梁題密の宗旨となりといへども。のふるところの。十名隨喜とも。はあはたし。
 たつとさかあ

つたへ聞大師は。第三地のぼさつ。高貴徳王菩薩とあり。我朝に誕生ましくて。三密を
 ひろめ。國家を利し。つねに高野の勝地をしめて。金剛定に入龍下の下生を期し給ふ。こ
 ろにおもんみれば。住吉大明神の彦本地も高貴徳王菩薩ありしとかや。しかれば高野大師
 と彦一休分身なり。おら有かたしと。のたまひしとかや。これ聖主の勅語あり。たつとむ
 へしと、扱寛弘年中に河内守久高當國に下向の時普光寺の住侶幡慶なたりけるは年來高野

よ住せんも。思ふこころあり。しかれば資糧もあらずしむ。いまた本意を。またさる
 あり。夢の中に。高野に参す。一人の高僧童子に坐して。われにむかつて。のたまひける
 へ。なんちはやく。此地又來るへし。衣食にいたつて。われあたふへし。皆丞相はわが
 逆世の身。小野の道風は我願世の身。ありと。われ修學をつとむる。ゆへに大師の冥應に
 おつかりけると幽靈。ありかたく。たもひけるとなり
 又ある時。東寺定額僧縁實といふ人。讃州善通寺の別當になりて。下向の時彼寺にして空
 海の淨筆を感得したまひけるに。その文にいはく
 卜^{ウラナヒ}居於高野樹下^{カウノノキノカミ}遊^{アソビ}神於土率雲上^{カミノクモノカミ}不^フ顯^{アキラカ}日^ヒ影^{カゲ}向^{ムカフ}檢^{ケン}知^チ所^{トコロ}及^{ツキ}遠^{トホク}跡^{アト}云^ク
 されは空海草創の砌接應經行の所。一度も其地に。のろむ人房縁のあさからざる事を。あ
 もひしるへし
 又あるとき。淨堂關白殿小野僧正に侍たいめん。つゝおてに仰られけるは。空海生身た
 しく。高野の廟窟にましますと入と星霜すてにひさしく。洗^{ソウ}李^リに。たどろへ若生こ
 ろつたなどして。むなしく拜^{イハヒ}動^{ウゴ}の望^{ノゾミ}をへたて。さらに風見の人も。かなしむへしく僧

正のたまひけるは。密教のころはせり。本より正像末の三時あじ洗李によるへからず。
 信^シ否^ヒよよるへし。うの機もし熟^{ジュク}せは其証うたかひあるへからず。もつこら清信のあもひを
 いたし給へし。あま全身を拜し給へざるべき。どのたまへり。これによつて。すまはち淨
 参詣^{サンギ}ありて山の。ふもとより奥の院にいたる途。一步三禮^{イッポさんらい}身をせめ心を。いたましめ淨
 の淨前に。うつくまりて。やゝ入しく懸念^{ケンネン}をこらしたまふに。淨廟^{じやうぶつ}たちまちに。ひらけて
 香染^{かうせん}の淨すがた。まのあたりにあらはれ。山をせたまへ。ありがたくて拜し。たてまつ
 られけるとなり

其後又宇治殿の。淨夢想のと有て。小野の僧正の淨許へ。つかはされし淨息に類はく。
 今夜の淨夢想也高野山は十方賢聖常住の地三世諸佛遊居の砌あり善神番々に是をまもり。
 星宿夜をたぐにこれに。やどる是釋迦轉法輪の地慈尊說法の山也一度此地をふむ聖は。三
 途の古郷に歸らず。一度此山に参る人は。かからず三會の下生の。あかつきよ逢と御夢想
 の有機希有也若これ。さたまれる記文あらば可^{べし}令^し言^は上^に給^は依^り淨^を氣^を色^を上^に啓^し如^し件^に

八月十九日

權中納言源

謹上 八小野法印御房 侍衣下

ある時平太相國藤州の宰吏。たりし時高野山の塔を修造。せられんかために高野に参詣し。ねんころに祈精をこらし。日ならず修造をせられければ丹誠冥慮に通じけるにや。大師あらはれ。出させ給ひて。一期の榮耀万事心にまかすへしと。御心地よけある。風情にせしめし告させ給ひしかば。大相國ありかた。しんくきもにめいして。おかみたてまつらんと。したまへづけすかごとくは。うせたまひし御人定とはいへども。威嚴よしといけるがごとし。ねそるへくたつとむへき事ならずや。

ろもく高野山金剛峯寺へ。八瑛にうひえて華嚴の心海に觀じ。山ノ兩部をかねて雙茶を石壁に。あらはせり空海御結界の文には此伽藍東南西北四維上下。あらゆる一切の正法をやふらん。毘那夜迦もろくの。惡神等は皆我結界七里が外に出され。正法をまもらん善神等の心にしたかひて伽藍に住して一心に佛法を住持せ。相承金剛乘の法門流布。ろの時也相應此所あり。かるかゆへに鐵國安民のため此峰にたひて除災秘密の道場を建立。院郭十方の境本部の十天。おのく寺をまもり。結界七里のあひた。地主山王ちかつて





守護し給ふ。いま新たに勸請し。奉まつる朝中の靈社一百廿ヶ所四方に。おのゝ三十社
毎月日へつに。たのゝ一社まとして人法を。たすけ鎮護し玉ひ伽藍を持し玉ふへしと。
かゝらせ玉へり三地大聖の勸請かかるからと。諸天善神の感應あふ。ねろろかあらんや。さ
れば嵯峨天皇の御時日本國の靈地を。えらんで九品を。さためられしには。高野をもつて
上品出生と。したまふ東山の信禪師の住し侍るよは。日域の佛土はこれ南山なり。ちかく
の空海御入定し玉ひて後。佛の出世をまち。遠くハ古佛の聖社なり。われかのみねに。の
ほりしとき夢に。見侍りし。十方世界の佛菩薩集會して。あるひは無相甚深の。をしへを
説。あるひは諸佛常恒の理を談するをや。心あらん人ハ。かならず彼地をふむべきものな
りとの記し給へり又元慶年中に眞然僧正奏せられけるは。金剛峯寺は諸佛の境界あり毒虫
あれども。人をあやまたず。煩惱即菩提の觀。しんぬべし谷ふかく峰たかけれ共道さかし
き事あし生死すなはち寂靜のむね察ししるへし。白河院の御とき近臣。あまた御前に伺候
じ。清談のついでに勅詔ありけるは日本邊土ありといへども。我國王として天下に自在
を得たり。當時如來の在世ならんよ。天竺十萬餘里ありとも。もろくの國王の中まで

参詣してんものぞ。仰出されたりしに。匡房卿やさく臣此みことのりを。きみのためよ
はづ。其ゆへり。ほどけの出世にあらざといへとも。我朝の中に聖地なきにあらざ高野山
に。弘法大師全身を。といめて入定あり。これ三國にたくひなき勝地あり。みやこをさる
事わづかに。三十里わが君いまだ臨幸したまひす。いはんや十萬餘里の煙浪を。しのひて
中天の。さかひに。りんかうましまさんやと。はくからずやされければ。みかとかつて
御感わつて。まどにやどころ。いはれありとて。やがて侍臣を。もよほして南山へ。御幸
ましましけり

如來在世に國王の殿にて御参詣あらんずる。御こゝちありし。おのゝ財力をおします。
行粧をひをつくらふべしと。せんじわりしかり。金玉をちりはめ。馬くらをかさり。錦織
をたちて。衣杉をととのへ旌旗天にひるがへり。書籠空よのぼり。綾羅地をてらして。彩
鳳野にみてり。明王の儉約も。しはらくゆるされて。大國のりんかうにも。はぢぬほどな
らしどかや

此山に轉軸山摩尼のみねといふ靈窟あり摩尼のみねには空海みつから如意輪の像をつくり

安置し奉り轉軸山にハ仙宮あり深山よ入人時として仙人をみる事ありとかや此外山中よ五
種の淨土ありとや侍りし也靈巖奇瑞おけてかそふべからずたよそ二十六のみね四方につら
まて本有無垢の智所をしめし三十六の水一河よ歸して皆同自性の佛徳をあらはす一度此
のみねをふむものひながく三有の苦域をこそ一念もりの信をもよふす人のかあら也二世の
願海をみつべきと云

弘法大師御一代記 終

明治十九年二月十六日御届

出版人

野村銀次郎

東京京橋區鎗屋町
拾四番地

發兌元

花堂

全區全町全番地

弘法大師御一代記

百十一

